

遠野物語

柳田国男



この書を外国に在る人々に呈す

この話はすべて遠野とのおのの人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月ごろより始めて夜分おりおり訪ね来たりこの話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上手にはあらざれども誠実なる人なり。自分もまた一字一句をも加減かげんせず感じたるままを書きたり。思うに遠野郷ごうにはこの類の物語なお数百件あるならん。我々はより多くを聞かんことを切望す。国内の山村にして遠野よりさらに物深き所にはまた無数の山神山人の伝説あるべし。願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ。この書のごときは陳勝吳広のみ。

昨年八月の末自分は遠野郷に遊びたり。花巻はなまきより十余里の路上には町場まちば三ヶ所あり。その他はただ青き山と原野なり。人煙の稀少きしょうなること北海道石狩いしかりの平野よりも甚だし。或いは新道なるが故に民居の来たり就ける者少なきか。遠野の城下はすなわち煙花の街なり。馬を駅亭の主人に借りて独り郊外の村々を巡りたり。その馬は黔くろき海草をもつて作りたる厚総あつふさを掛かけたり。虻あぶ多きためなり。猿さるケ石の溪谷は土肥こえ

てよく拓ひらけたり。路傍に石塔の多きこと諸国その比を知らず。高処たかより展望すれば早稲わせまさに熟し晚稲ばんとうは花盛りにて水はことごとく落ちて川にあり。稲の色合いろあいは種類によりてさまざまなり。三つ四つ五つの田を続けて稲の色の同じきはすなわち一家に属する田にしていわゆる名処みやうしょの同じきなるべし。小字こあざよりさらに小さき区域の地名は持主にあらざればこれを知らず。古き売買譲与の証文には常に見ゆる所なり。附馬牛つくもうしの谷へ越ゆれば早池峯はやちねの山は淡く霞かすみ山の形は菅笠すげがさのごとくまた片仮名かたかなのへの字に似たり。この谷は稲熟することさらに遅く満目一色に青し。細き田中の道を行けば名を知らぬ鳥ありて雛ひなを連つれて横よこぎりたり。雛の色は黒に白き羽まじりたり。始めは小さき鶏かと思ひしが溝みぞの草に隠れて見えざればすなわち野鳥なることを知れり。天神の山には祭ありて獅子踊ししおどりあり。ここにのみは軽く塵ちりたち紅あかき物いささかひらめきて一村の緑に映じたり。獅子踊というは鹿しかの舞まいなり。鹿の角つのをつけたる面を被かぶり童子五六人剣を抜きてこれとともに舞うなり。笛の調子高く歌は低くして側かたわらにあれども聞きがたし。日は傾きて風吹き

酔いて人呼ぶ者の声も淋しく女は笑い児は走れどもなお旅愁をいかんともする能わざりき。孟蘭盆あたに新しき仏ある家は紅白の旗を高く揚げて魂たましいを招く風あり。峠の馬上とうげにおいて東西を指点するにこの旗十数所あり。村人の永住の地を去らんとする者とかりそめに入りこみたる旅人とまたかの悠々たる靈山とを黄昏は徐たそがれに來たりて包容し尽したり。遠野郷には八ヶ所の觀音堂あり。一木をもつて作りしなり。この日報賽ほうさいの徒多く岡の上に灯火見え伏鉦ふせがねの音聞えたり。道ちがえの叢の中には雨風祭の藁人形あり。あたかもくたびれたる人のごとく仰臥ぎようがしてありたり。以上は自分が遠野郷にてえたる印象なり。

思うにこの類の書物は少なくも現代の流行にあらず。いかに印刷が容易なればとてこんな本を出版し自己の狹隘きようあいなる趣味をもつて他人に強しいんとするは無作法ぶさほうの仕業しわざなりという人あらん。されどあえて答う。かかる話を聞きかかる処ところを見てきてのちこれを人に語りたがらざる者果はたしてありや。そのような沈黙しんもくにしてかつ慎み深き人は少なくとも自分の友人の中にはあることなし。いわんやわが九百年前の先輩せんぱい『今昔物

語』のごときはその当時にありてすでに今は昔の話なりしに反しこれはこれ目前の出来事なり。たとえ敬虔けいけんの意と誠実の態度とにおいてはあえて彼を凌ぐしのことを得うという能わざらんも人の耳をみ経ること多からず人の口と筆とをやと備いたること甚だ僅わずかなりし点においては彼の淡泊無邪気なる大納言殿だいなごんのかえつて来たり聴くに値せり。近代の御伽百物語の徒に至りてはその志しやすでに陋ろうかつ決してその談の妄誕もうたんにあらざることひそかを誓いえず。窃にもつてこれと隣を比するを恥とせり。要するにこの書は現在の事実なり。単にこれのみをもつてするも立派なる存在理由ありと信ず。ただ鏡石子は年わずかに二十四五自分もこれに十歳長ずるのみ。今の事業多き時代に生まれながら問題の大小をも弁わきまえず、その力を用いるところ当とうを失えりという人あらば如何いかん。明神の山のみみずくの木兎のごとくあまりにその耳を尖とがらしあまりにその眼を丸くし過ぎたりと責せむる人あらば如何。はて是非もなし。この責任のみは自分が負わねばならぬなり。

おきなさび飛ばず鳴かざるをちかたの森のふくろふ笑ふらんか

三
題目^四

(下の数字は話の番号なり、ページ数にはあらず)

地勢

一、五、六七、一一一

神の始

二、六九、七四

里の神

九八

カクラサマ

七二―七四

ゴンゲサマ

一一〇

家の神

一六

オクナイサマ

一四、一五、七〇

オシラサマ

六九

ザシキワラシ

一七、一八

山の神

神女

八九、九一、九三、一〇二、一〇七、一〇八

天狗

二七、五四

山男

二九、六二、九〇

山女

五、六、七、九、二八、三〇、三一、九二

山の靈異

三、四、三四、三五、七五

三二、三三、六一、九五

仙人堂

四九

蝦夷の跡

一一二

塚と森と

六六、一一一、一一三、一一四

姥神うば

六五、七一

館たての址

六七、六八、七六

昔の人

家のさま

八、一〇、一一、一二、二一、二六、八四

家の盛衰

八〇、八三

マヨイガ

一三、一八、一九、二四、二五、三八、六三

前兆

六三、六四

魂の行方

二〇、五二、七八、九六

二二、八六―八八、九五、九七、九九、一〇〇

まぼろし

二三、七七、七九、八一、八二

雪女

一〇三

川童

五五―五九

猿の経立ふつたち

四五、四六

猿

四七、四八

狼おいぬ

熊

三六一—四二

狐

四三

色々の鳥

六〇、九四、一〇一

花

五一—五三

小正月の行事

三三、五〇

一四、一〇二—一〇五

雨風祭

一〇九

昔々

一二五—一二八

歌謡

一二九

五

一 遠野郷とのおのこうは今の陸中上閉伊郡かみへいの西の半分、山々にて取り囲まれた平地なり。新町村しんちょうそんにては、遠野、土淵つちぶち、附馬牛つくもうし、松崎あおざき、青笹あおざさ、上郷かみこう、おとも、綾織あやおり、鱒沢ますざわ、宮守みやもり、達會部たつそべの一町十ヶ村に分かつ。近代或いは西閉伊郡とも称し、中古にはまた遠野保とのおほとも呼べり。今日郡役所のある遠野町はすなわち一郷の町場まちばにして、南部家なんぶけ一万石の城下なり。城を横田城よこたじょうともいう。この地へ行くには花巻はなまきの停車場にて汽車を下り、きたかみがわ北上川を渡り、その川の支流猿ヶ石川さるがいしがわの溪たにを伝つたいて、東の方へ入ると十三里、遠野の町に至る。山奥には珍しき繁華の地なり。伝えいう、遠野郷の地大昔はすべて一円の湖水なりしに、その水猿ヶ石川となりて人界に流れ出でしより、自然にかくのごとき邑落ゆうらくをなせしなりと。されば谷川のこの猿ヶ石に落合うもの甚だ多く、俗ななないやさきに七内八崎ありと称す。内ないは沢または谷のことにて、奥州の地名には多くあり。

○遠野郷のトーはもとアイヌ語の湖という語より出でたるなるべし、ナイもアイヌ語なり。

二 遠野の町は南北の川の落合おちあいにあり。以前は七十七里しちしちじゅうりとて、七つの溪谷たにのおの七十里の奥より売買ばいばいの貨物を聚めあつ、その市いちの日は馬千匹、人千人の賑にぎわしきなりき。四方の山々の中に最も秀ひいでたるを早池峯はやちねという、北の方附馬牛つくもうしの奥にあり。東の方には六角牛山ろっこうし立てり。石神いしがみという山は附馬牛と達會部たつそべとの間にありて、その高さ前の二つよりも劣おとれり。大昔に女神あり、三人の娘を伴ともないてこの高原に來たり、今の來内村らいないの伊豆権現いずこんげんの社あるとところに宿やどりし夜、今夜よき夢を見たらん娘むすめによき山を与うべしと母の神の語りて寝たりしに、夜深く天より靈華れいか降りて姉の姫ひめの胸の上に止りしを、末の姫眼覚めざめて窃ひそかにこれを取り、わが胸の上に載せたりしかば、ついに最も美しき早池峯の山を得、姉たちは六角牛と石神とを得たり。若き三人の女神おのおの三の山に住し今もこれを領ゆえしたもう故に、遠野の女どもはその妬ねたみを畏おそれて今もこの山には遊ばずといえり。

○この一里は小道すなわち坂東道ばんとうみちなり、一里が五丁または六丁なり。
○タツソベもアイヌ語なるべし。岩手郡玉山村にも同じ大字おおあざあり。

○上郷村大字来内、ライナイもアイヌ語にてライは死のことナイは沢なり、水の静かなるよりの名か。

三八 山々の奥には山人住めり。栃内村とちない和野わのの佐々木嘉兵衛かへえという人は今も七十余にて生存せり。この翁おきな若かりしころ猫をして山奥に入りしに、遥はるかなる岩の上に美しき女一人ありて、長き黒髪を梳くしけずりていたり。顔の色きわめて白し。不敵の男なれば直ただちに銃つつを差し向けて打ち放せしに弾たまに応じて倒れたり。そこに馳かけつけて見れば、身のたけ高き女にて、解きたる黒髪はまたそのたけよりも長かりき。のちの験しるしにせばやと思ひてその髪をいささか切り取り、これを縮わがねて懐ふところに入れ、やがて家路に向いしに、道の程にて耐たえがたく睡眠もよおを催しければ、しばらく物蔭ものかげに立寄りてまどろみたり。その間夢ゆめと現うつとの境のような時に、これも丈たけの高き男一人近よりて懐中に手を差し入れ、かの縮わがねたる黒髪を取り返し立ち去ると見ればたちまち睡ねむりは覚めたり。山男なるべしといえり。

○土淵村大字栃内。

四 山口村の吉兵衛という家の主人、根子立ねつこだちという山に入り、笹ささを茹かりて束たばとなし担かつぎて立上らんとする時、笹原の上を風の吹き渡るに心づきて見れば、奥の方なる林の中より若き女の穉おさなこ児おを負おいたるが笹原の上を歩みて此方へ来るなり。きわめてあでやかなる女にて、これも長き黒髪を垂れたり。児こを結ゆいつけたる紐ひもは藤つるの蔓つるにて、着きたる衣類は世の常じまものの縞物しまものなれど、裾すそのあたりぼろぼろに破れたるを、いろいろの木きの葉はなどを添つえて綴つづりたり。足は地に着つくと覺えず。事もなげに此方に近より、男のすぐ前を通りて何方いすかたへか行き過ぎたり。この人はその折おその怖おそろしきより煩わづらい始はじめて、久しく病やみてありしが、近きころ亡うせたり。

○土淵村大字山口、吉兵衛は代々の通称なればこの主人もまた吉兵衛ならん。

一〇 遠野郷より海岸の田たノ浜はま、吉利吉里きりきりなどへ越ゆるには、昔より

ふえんかきとうげ

笛吹峠やまみちという山路あり。

山口村より六角牛ろっこうしの方へ入り路のりも近かり

しかど、近年この峠を越ゆる者、山中にて必ず山男山女に出逢であうより、

誰もみな怖ろしがりて次第に往来も稀になりしかば、ついに別の路をさかいげとうげ境木峠という方に開き、和山を馬次場として今は此方ばかりを越ゆるようになれり。二里以上の迂路なり。

○山口は六角牛に登る山口なれば村の名となれるなり。

六 遠野郷にては豪農のことを今でも長者という。青笹村大字糠前の長者の娘、ふと物に取り隠されて年久しくなりしに、同じ村の何某という獵師、或る日山に入りて一人の女に遭う。怖ろしくなりてこれを撃たんとせしに、何おじではないか、ぶつなという。驚きてよく見れば彼の長者がまな娘なり。何故にこんな処にはおるぞと問えば、或る物に取られて今はその妻となれり。子もあまた生みたれど、すべて夫が食い尽して一人此のごとくあり。おのれはこの地に一生を送ることなるべし。人にも言うな。御身も危うければ疾く帰れというままた、その在所をも問い明らめずして遁げ還れりという。

○糠の前は糠の森の前にある村なり、糠の森は諸国の糠塚と同じ。遠野郷にも糠森・糠塚多くあり。

七 二 上郷村の民家の娘、栗くりを拾いに山に入りたるまま帰り来きたらず。

家の者は死したるならんと思ひ、女のしたる枕まくらを形代かたしろとして葬式とりおこなを執行い、さて二三年を過ぎたり。しかるにその村の者猫ねこをして五葉山ごようざんの腰のあたりに入りしに、大なる岩の蔽おほいかかりて岩窟いわくのようになれるところにて、はか図らずこの女に逢あいたり。互いに打ち驚おどき、いかにしてかかる山にはおるかと思へば、女の曰いわく、山に入りて恐ろしき人にさらわれ、こんなところに来たるなり。遁にげて帰らんと思へど些いささの隙すきもなしとのことなり。その人はいかなる人かと問うに、自分には並なみの人間と見ゆれど、ただ丈たけきわめて高く眼の色少し凄すこしと思わる。子供も幾人か生なみたれど、我に似にざれば我子にはあらずといいて食くうにや殺すにや、みないずれへか持ち去りてしまふなりという。まことに我々と同じ人間かと押し返して問へば、衣類なども世の常なれど、ただ眼の色少しがえり。ひといちあい一市間に一度か二度、同じようなる人四五人集まりきて、何事か話をなし、やがて何方どちへか出て行くなり。食物など外より持ち来たるを見れば町へも出ることならん。かく言ううちにも今に

そこへ帰つて来るかも知れずという故、獵師も怖ろしくなりて帰りたりといえり。二十年ばかりも以前のことかと思わる。

○一市間は遠野の町の市の日と次の市の日の間なり。月六度の市なれば一市間はすなわち五日のことなり。

八 一三 黄昏たそがれに女や子供の家の外に出ている者はよく神隠かみかくしにあうことは他の国々と同じ。松崎村の寒戸さむとというところの民家にて、若き娘梨なしの樹きの下に草履ぞうりを脱ぎ置きたるまま行方ゆくえを知らずなり、三十年あまり過ぎたりしに、或る日親類知音の人々その家に集まりあつてありしところへ、きわめて老いさらばいてその女帰り来たれり。いかにして帰つて来たかと問えば人々に逢いたかりし故帰りしなり。さらばまた行かんとして、再び跡あとを留めとどめず行き失せたり。その日は風の烈はげしく吹く日なりき。されば遠野郷の人は、今でも風の騒がしき日には、きようはサムトの婆ばばが帰つて来そうな日なりという。

九 一四 菊池弥之助やのすけという老人は若きころ駄賃だちんを業とせり。笛の名人にて夜通よとおしに馬を追いて行く時などは、よく笛を吹きながら行きたり。

ある薄月夜に、あまたの仲間の者とともに浜へ越ゆる境木峠を行くとて、また笛を取り出して吹きすさみつつ、大谷地おおやちというところの上を過ぎたり。大谷地は深き谷にて白樺しらかんばの林しげく、その下は葦あしなど生じしめ湿りたる沢なり。この時谷の底より何者か高き声にて面白いぞーと呼よばわる者あり。一同ことごとく色を失い遁げ走りたりといえり。

○ヤチはアイヌ語にて湿地の義なり、内地に多くある地名なり。ま

たヤツともヤトともヤともいう。

一五

一〇 この男ある奥山に入り、茸きのこを採るとして小屋を掛け宿とまりてありしに、深夜に遠きところにてきやーという女の叫び声聞え胸を轟とんとんかしたることあり。里へ帰りて見れば、その同じ夜、時も同じ刻限に、自分の妹なる女その息子のために殺されてありき。

一六

一一 この女というは母一人子一人の家なりしに、嫁よめと姑しゅうととの仲悪しくなり、嫁はしばしば親里へ行きて帰り来ざることあり。その日は嫁は家において打ち臥ふしておりしに、昼のころになり突然と倅せがれのいうには、ガガはとても生いかしては置かれぬ、今日きょうはきつと殺すべしとて、

大なる草薙鎌くさかりがまを取り出し、ごしごしと磨ぎ始めたり。そのありさまさ
らに戯言たわむれごととも見えざれば、母はさまざまに事を分けて詫びたれども少
しも聴かず。嫁も起き出でて泣きながら諫めたれど、露つゆしたか従う色もな
く、やがて母が遁れ出でんとする様子ようすあるを見て、前後の戸口をこと
ごとく鎖とざしたり。使用に行きたしといえ、おのれみずから外より便
器を持ち来たりてこれへせよという。夕方にもなりしかば母もついに
あきらめて、大なる囲炉裡いろりの側かたわらにうずくまりただ泣きていたり。倅せがれは
よくよく磨ぎたる大鎌を手にして近より来たり、まず左の肩口を目が
けて薙ぐなようにすれば、鎌の刃先はさき炉の上うへの火棚ひだなに引ひつかかりてよく斬
れず。その時に母は深山の奥にて弥之助が聞きつけしようなる叫び声
を立てたり。二度目には右の肩より切り下げたるが、これにてもなお
死絶しにたえずしてあるところへ、里人さとびとら驚きて馳はせつけ倅せがれを取り抑え直に
警察官を呼び渡わたしたり。警官がまだ棒を持ちてある時代のことなり。
母親は男が捕とらえられ引き立てられて行くを見て、滝のように血の流る
る中より、おのれは恨も抱いだかず死いぬるなれば、孫四郎は宥ゆるしたまわ

れという。これを聞きて心を動かさぬ者はなかりき。孫四郎は途中にてもその鎌を振り上げて巡査を追い廻しなどせしが、狂人なりとて放免せられて家に帰り、今も生きて里にあり。

○ガガは方言にて母ということなり。

一七

一二 土淵村山口に新田乙蔵という老人あり。村の人は乙爺という。今は九十に近く病みてまさに死なんとす。年頃遠野郷の昔の話をよく知りて、誰かに話して聞かせ置きたしと口癖のようにいへど、あまり臭ければ立ち寄りて聞かんとする人なし。処々の館の主の伝記、家々の盛衰、昔よりこの郷に行われし歌の数々を始めとして、深山の伝説またはその奥に住める人々の物語など、この老人最もよく知れり。

○惜むべし、乙爺は明治四十二年の夏の始めになくなりたり。

一八

一三 この老人は数十年の間山の中に独りにて住みし人なり。よき家柄なれど、若きころ財産を傾け失いてより、世の中に思いを絶ち、峠の上に小屋を掛け、甘酒を往来の人に売りて活計とす。駄賃の徒はこの翁を父親のように思いて、親しみたり。少しく収入の余あれば、町

に下りきて酒を飲む。赤毛布あかゲツトにて作りたる半纏はんてんを着て、赤き頭巾あざきんを被かぶり、酔えば、町の中を躍りて歸るに巡査もとがめず。いよいよ老衰して後、旧里きゆうりに歸りあわれなる暮しくらをなせり。子供はすべて北海道へ行き、翁ただ一人なり。

一四一九 部落ぶらくには必ず一戸の旧家ありて、オクナイサマという神を祀まつる。その家をば大同だいたうという。この神の像ぞうは桑くわの木を削りて顔かおを描えがき、四角なる布ぬのの真中まんなかに穴を明け、これを上うへより通とおして衣裳いしやうとす。正月の十五日には小字中こあざじゆうの人々この家に集まり来たりてこれを祭る。またオシラサマという神あり。この神の像もまた同じようにして造り設もうけ、これも正月の十五日に里人さとびと集まりてこれを祭る。その式には白粉おしろいを神像の顔に塗ることあり。大同の家には必ず畳たたみ一帖いちじゆうの室しつあり。この部屋へやにて夜寝よるねる者はいつとも不思議に遭あう。枕まくらを反かえすなどは常のことなり。或いは誰かに抱だき起おこされ、または室より突き出いさるることもあり。およそ静かに眠ねることを許さぬなり。

○オシラサマは双神なり。アイヌの中にもこの神あること『蝦夷風えぞ

俗彙聞』に見ゆ。

○羽後苧和野の町にて市の神の神体なる陰陽の神に正月十五日白粉を塗りて祭ることあり。これと似たる例なり。

二〇

一五 オクナイサマを祭れば幸多し。土淵村大字柏崎の長者阿部氏、村にては田圃の家という。この家にて或る年田植の人手足らず、明日は空も怪しきに、わずかばかりの田を植え残すことかなどつぶやきてありしに、ふと何方よりもなく丈低き小僧一人来たりて、おのれも手伝い申さんというに任せて働かせて置きしに、午飯時に飯を食わせんとて尋ねたれど見えぬ。やがて再び歸りきて終日、代を掻きよはたらく働きてくれしかば、その日に植えはてたり。どこの人かは知らぬが、晩にはきて物を食いたまえと誘いしが、日暮れてまたその影見えぬ。家に歸りて見れば、縁側に小さき泥の足跡あまたありて、だんだんに座敷に入り、オクナイサマの神棚のところかみだなに止りてありしかば、さてはと思つてその扉を開き見れば、神像の腰より下は田の泥にまみれてよじいませし由。

一六 三 コンセサマを祭れる家も少なからず。この神の神体はオコマ

サマとよく似たり。オコマサマの社は里に多くあり。石または木にて男の物を作りて捧ぐるなり。今はおいおいとその事少なくなれり。

一七 三 旧家にはきゆうかザシキワラシという神の住みたもう家少なからず。

この神は多くは十二三ばかりの童児なり。おりおり人に姿を見するこ
とあり。土淵村大字飯豊いいでの今淵勘十郎いまぶちという人の家にては、近きころ
高等女学校にいる娘の休暇にて帰りてありしが、或る日廊下ろうかにてはたと
ザシキワラシに行き逢あい大いに驚きしことあり。これは正まさしく男の児
なりき。同じ村山口なる佐々木氏にては、母人ひとり縫物ぬいものしておりし
に、次の間にて紙のがさがさという音あり。この室は家の主人の部屋へや
にて、その時は東京に行き不在の折なれば、怪しと思いて板戸を開き
見るに何の影もなし。しばらくの間あいたすわ坐りて居ればやがてまた頻しきりに鼻を
鳴らす音あり。さては座敷ざしきワラシなりけりと思えり。この家にも座敷
ワラシ住めりということ、久しき以前よりの沙汰さたなりき。この神の宿やど
りたもう家は富貴自在なりということなり。

○ザシキワラシは座敷童衆なり。この神のこと『石神問答』中にも
記事あり。

一八 二三 ザシキワラシまた女の児なることあり。同じ山口なる旧家にて山口孫左衛門という家には、童女の神二人いませりということを久しく言い伝えたりしが、或る年同じ村の何某という男、町より帰ると留場の橋のほとりにて見馴れざる二人のよき娘に逢えり。物思わしき様子にて此方へ来たる。お前たちはどこから来たと問えば、おら山口の孫左衛門がところからきたと答う。これから何処へ行くのかと聞けば、その村の何某が家にと答う。その何某はやや離れたる村にて、今も立派に暮せる豪農なり。さては孫左衛門が世も末だなど思いしが、それより久しからずして、この家の主従二十幾人、茸きのこの毒あたに中りて一日のうちに死に絶え、七歳の女の子一人を残せしが、その女もまた年老いて子なく、近きころ病やみて失せたり。

一九 二四 孫左衛門が家にては、或る日梨なしの木きのこのめぐりに見馴れぬ茸きのこのあまた生はえたるを、食はわんか食はうまじきかと男おとこどもの評議してあるを

聞きて、最後の代の孫左衛門、食わぬがよしと制したれども、下男の人かいうには、いかなる茸にても水桶の中に入れて芋殻をもつてよくかき廻してのち食えば決して中ることなしとて、一同この言に従い家内ことごとくこれを食いたり。七歳の女の児はその日外に出でて遊びに気を取られ、昼飯を食いに帰ることを忘れしたために助かりたり。不意の主人の死去にて人々の動転してある間に、遠き近き親類の人々、或いは生前に貸ありといい、或いは約束ありと称して、家の貨財は味増の類までも取り去りしかば、この村草分の長者なりしかども、一朝にして跡方もなくなりたり。

二〇 三五 この兇變の前にはいろいろの前兆ありき。男ども苴置きたる稜を出すとて三ツ齒の鋏にて掻きまわせしに、大なる蛇を見出した。これも殺すなど主人が制せしをも聴かずして打ち殺したりしに、その跡より稜の下にいくらかともなき蛇ありて、うごめき出でたるを、男ども面白半分にことごとくこれを殺したり。さて取り捨つべきところもなければ、屋敷の外に穴を掘りてこれを埋め、蛇塚を作る。その蛇は

簀あじかに何荷なんがともなくありたりといえり。

二六

二一 右の孫左衛門は村には珍しき学者にて、常に京都より和漢の書を取り寄せて読み耽ふけりたり。少し変人という方なりき。狐きつねと親しくなりて家を富ます術を得んと思ひ立ち、まず庭の中に稲荷いなりの祠ほくらを建て、自身京のほに上りて正一位の神階を請うけて帰り、それよりは日々一枚の油揚あぶらげを欠かすことなく、手ずから社頭に供そなえて拝をなせしに、のちには狐な馴なれて近づけども遁にげず。手を延ばしてその首を抑おさえなどしたりという。村にありし薬師の堂守どうもりは、わが仏様は何ものをも供そなえざれども、孫左衛門の神様よりは御利益ごりやくありと、たびたび笑いごとにしたりとなり。

二二 二七 佐々木氏の曾祖母そうそぼ年よりて死去せし時、棺かんに取り納おさめ親族の者集まりきてその夜は一同座敷にて寝たり。死者の娘にて乱心のため離縁せられたる婦人もまたその中にありき。喪もの間は火の気を絶たやすことを忌いむがところの風ふうなれば、祖母と母との二人のみは、大なるいろり困り炉り裡りの両側りようがわに坐すわり、母人は旁ははびとに炭籠かたわらを置すみかこき、おりおり炭を継つぎてありしに、ふと裏口の方より足音してくる者あるを見れば、亡なくなりし

老女なり。平生腰かがみて衣物の裾の引きずるを、三角に取り上げて前に縫いつけてありしが、まざまざとその通りにて、縞目にも見覚えあり。あなやと思う間もなく、二人の女の坐れる炉の脇を通り行くとして、裾にて炭取にさわりに、丸き炭取なればくるくるとまわりたり。母人は氣丈の人なれば振り返りあとを見送りたれば、親縁の人々の打ち臥したる座敷の方へ近より行くと思うほどに、かの狂女のけたたましき声にて、おばあさんが来たと呼びたり。その余の人々はこの声に睡を覚しただ打ち驚くばかりなりしといえり。

○マーテルリンクの『侵入者』を想い起こさしむ。

二三 二八 同じ人の二七日の速夜に、知音の者集まりて、夜更くるまで念仏を唱え立ち帰らんとする時、門口の石に腰掛けてあちらを向ける老女あり。そのうしろ付正しく亡くなりし人の通りなりき。これは数多の人見たる故に誰も疑わず。いかなる執着のありしにや、ついに知る人はなかりしなり。

二四 二九 村々の旧家を大同というは、大同元年に甲斐国より移り来た

る家なればかくいうとのことなり。大同は田村將軍征討の時代なり。甲斐は南部家の本国なり。二つの伝説を混じたるに非ざるか。

○大同は大洞かも知れず、洞とは東北にて家門または族ということなり。『常陸国志』ひたちのこくしに例あり、ホラマエという語のちに見ゆ。

二五 三〇 大同の祖先たちが、始めてこの地方に到着せしは、あたかも歳の暮とくにて、春のいそぎの門松かどまつを、まだ片方かたほうはえ立てぬうちに早元はや日になりたればとて、今もこの家々にては吉例として門松の片方を地に伏せたるままにて、標繩しめなわを引き渡すとのことなり。

二六 三三 柏崎たんぼの田圃たんぼのうちと称する阿倍氏はことに聞えたる旧家なり。この家の先代に彫刻たくみに巧なる人ありて、遠野一郷の神仏の像にはこの人の作りたる者多し。

二七 三三 早池峯はやちねより出でて東北の方宮古みやこの海に流れ入る川を閉伊川へいがわという。その流域はすなわち下閉伊郡なり。遠野の町の中にて今は池いけの端はたという家の先代の主人、宮古に行きての帰るさ、この川の原台はらだいの淵ふちというあたりを通りしに、若き女ありて一封の手紙たぐを托す。遠野の町

の後なる物見山の中腹にある沼に行きて、手を叩けば宛名の人が来べしとなり。この人請け合いはしたれども路々心に掛りてとつおいつせしに、一人の六部に行き逢えり。この手紙を開きよみて曰く、これを持ち行かば汝の身に大なる災あるべし。書き換えて取らすべしとて更に別の手紙を与えたり。これを持ちて沼に行き教えのごとく手を叩きしに、果して若き女いでて手紙を受け取り、その札なりとてきわめて小さき石臼をくれたり。米を一粒入れて回せば下より黄金出づ。この宝物の力にてその家やや富有になりしに、妻なる者慾深くして、一度にたくさん米をつかみ入れしかば、石臼はしきりに自ら回りて、ついには朝ごとに主人がこの石臼に供えたりし水の、小さき窪みの中に溜りてありし中へ滑り入りて見えなくなりたり。その水溜りはのちに小さき池になりて、今も家の旁にあり。家の名を池の端というもその為なりという。

○この話に似たる物語西洋にもあり、偶合にや。

二八 始めて早池峯に山路をつけたるは、附馬牛村の何某という獵

師にて、時は遠野の南部家入部の後のことなり。その頃までは土地の者一人としてこの山には入りたる者なかりしと。この獵師半分ばかり道を開きて、山の半腹に仮小屋を作りておりしころ、或る日炉の上に餅をならべ焼きながら食いおりしに、小屋の外を通る者ありて頻に中を窺うさまなり。よく見れば大なる坊主なり。やがて小屋の中に入り来たり、さも珍しげに餅の焼くるを見てありしが、ついにこらえ兼ねて手をさし延べて取りて食う。獵師も恐ろしければ自らもまた取りて与えしに、嬉しげになお食いたり。餅皆になりたれば帰りぬ。次の日もまた来るならんと思ひ、餅によく似たる白き石を二つ三つ、餅にまじえて炉の上に載せ置きしに、焼けて火のようになれり。案のごとくその坊主きようもきて、餅を取りて食うこと昨日のごとし。餅尽きてのちその白石をも同じように口に入れたりしが、大いに驚きて小屋を飛び出し姿見えすなれり。のちに谷底にてこの坊主の死してあるを見たりといえり。

○北上川の中古の大洪水に白髪水というがあり、白髪の姥を欺き餅

に似たる焼石を食わせし崇なりという。この話によく似たり。

三四

鶏頭山けいとうざんは早池峯の前面に立てる峻峯しゅんほうなり。麓ふもとの里にてはまた

二九

前薬師まえやくしともいう。天狗住てんぐめりとして、早池峯に登る者も決してこの山は

掛かけず。山口のハネトという家の主人、佐々木氏の祖父と竹馬の友な

り。きわめて無法者にて、鉞まさかりにて草を苅かり鎌かまにて土を掘るなど、若き

時は乱暴の振舞ふるまいのみ多かりし人なり。或る時人と賭かけをして一人にて前

薬師に登りたり。帰りての物語に曰く、頂上に大なる岩あり、その岩

の上に大男三人いたり。前にあまたの金銀をひろげたり。この男の近

よるを見て、気色けしきばみて振り返る、その眼の光きわめて恐ろし。早池

峯に登りたるが途みちに迷いて来たるなりと言え、然しからば送りて遣やるべ

しとして先に立たち、麓ふもと近ききところまで来たり、眼を塞ふさげと言うままたに、

暫時そこに立ちている間に、たちまち異人は見えなくなりたりという。

三五

三〇 小国村おぐにの何某という男、或る日早池峯に竹を伐きりに行きしに、

地竹じだけ

のおびただしく茂りたる中に、大なる男一人寝ねていたるを見たり。

地竹にて編みたる三尺ばかりの草履ぞうりを脱ぬぎてあり。仰あおに臥ふして大なる

いびき
 躰をかきてありき。

○下閉伊郡小国村大字小国。

○地竹は深山に生ずる低き竹なり。

三六

三一 遠野郷の民家の子女にして、異人にさらわれて行く者年々多くあり。ことに女に多しとなり。

三七

三二 千晚ヶ岳は山中に沼あり。この谷は物すごく腥き臭のするところにて、この山に入り帰りたる者はまことに少なし。昔何の隼人という獵師あり。その子孫今もあり。白き鹿を見てこれを追いこの谷に千晚こもりたれば山の名とす。その白鹿撃たれて遁げ、次の山まで行きて片肢折れたり。その山を今片羽山という。さてまた前なる山へきてついに死したり。その地を死助という。死助権現とて祀れるはこの白鹿なりという。

○宛然として古風土記をよむがごとし。

三八

三三 白望の山に行きて泊れば、深夜にあたりの薄明るくなることあり。秋のころ茸を採りに行き山中に宿する者、よくこの事に逢う。

また谷のあなたにて大木を伐り倒す音、歌の声など聞ゆることあり。この山の大きさは測るべからず。五月に萱を刈りに行くとき、遠く望めば桐の花の咲き満ちたる山あり。あたかも紫の雲のたなびけるがごとし。されどもついにそのあたりになづくこと能わず。かつて茸を採りに入りし者あり。白望の山奥にて金の樋と金の杓とを見たり。持ち帰らんとするにきわめて重く、鎌にて片端を削り取らんとしたれどそれもかなわず。また来んと思ひて樹の皮を白くし栞としたりしが、次の日人々とともに行ききてこれを求めたれど、ついにその木のありかをも見出しえずしてやみたり。

三九

三四 白望の山続きに離森はなれもりというところあり。その小字に長者屋敷

というは、全く無人の境なり。ここに行きて炭を焼く者ありき。或る夜その小屋の垂菰たれごもをかかけて、内を窺う者を見たり。髪を長く二つに分けて垂れたる女なり。このあたりにも深夜に女の叫び声を聞くことは珍しからず。

四〇

三五 佐々木氏の祖父の弟、白望に茸を採りに行ききて宿りし夜、谷

を隔てたるあなたの大きな森林の前を横ぎりて、女の走り行くを見た
り。中空を走るように思われたり。待てちやアと二声ばかり呼ばわり
たるを聞けりとぞ。

三六 四一 猿の経立、御犬の経立は恐ろしきものなり。御犬とは狼のこ

となり。山口の村に近き二ツ石山は岩山なり。ある雨の日、小学校よ
り帰る子どもこの山を見るに、処々の岩の上に御犬うずくまりてあり。
やがて首を下より押しあぐるようにしてかわるがわる吠えたり。正面
より見れば生まれ立ての馬の子ほどに見ゆ。後から見れば存外小さし
といえり。御犬のうなる声ほど物凄く恐ろしきものはなし。

三七 四二 境木峠と和山峠との間に、昔は駄賃馬を追う者、しばしば

狼に逢いたりき。馬方らは夜行には、たいてい十人ばかりも群をなし、

その一人が牽く馬は一端綱とてたいてい五六七匹までなれば、常に四
五十匹の馬の数なり。ある時二三百ばかりの狼追いかたり、その足音
山もどよむばかりなれば、あまりの恐ろしさに馬も人も一所に集まり
て、そのめぐりに火を焼きてこれを防ぎたり。されどなおその火を躍

り越えて入り来るにより、ついには馬の綱を解きこれを張り回らせしに、おとしあな 窸などなりと思ひけん、それよりのちは中に飛び入らず。遠くより取りと 囲かこみて夜の明あけるまで吠えてありきとぞ。

三八 四三 おとも 小友村の旧家の主人にて今も生存せる某爺なにがしじいという人、町より帰りに頻しきりに御犬の吠ほゆるを聞きて、酒に酔いたればおのれもまたその声をまねたりしに、狼も吠えながら跡あとより来るようなり。恐ろしくなりて急ぎ家に帰り入り、門の戸を堅かたく鎖しきして打ち潜ひそみたれども、夜通し狼の家をめぐりて吠ゆる声やまず。夜明よあけて見れば、馬屋の土台どだいの下を掘り穿うがちて中に入り、馬の七頭ありしをことごとく食い殺していたり。この家はそのころより産やや傾きたりとのことなり。

四四

三九 佐々木君幼きころ、祖父と二人にて山より帰りしに、村に近き谷川の岸の上に、大なる鹿の倒れてあるを見たり。横腹は破れ、殺されて間まもなきにや、そこよりはまだ湯気ゆげ立てり。祖父の曰く、これは狼が食いたるなり。この皮ほしけれども御犬は必ずどこかこの近所に隠れて見ておるに相違なければ、取ることができぬといえり。

四〇 四五 草の長さ三寸あれば狼は身を隠すといえり。草木の色の移り

行くにつれて、狼の毛の色も季節きせつごとに変わりて行くものなり。

四一 四六 和野の佐々木嘉兵衛、或る年境木越の大谷地へ狩にゆきたり。

死助しすけの方より走れる原なり。秋の暮のことにて木の葉は散り尽し山もあらわなり。向うの峯むねより何百とも知れぬ狼此方へ群むれて走りくるを見て恐ろしさに堪えず、樹の梢こすえに上りてありしに、その樹の下を夥おびたしき足音して走り過ぎ北の方へ行けり。そのころより遠野郷には狼甚だ少なくなれりとのことなり。

四二 四七 六角牛山の麓ふもとにオバヤ、板小屋などいふところあり。広き萱山かややま

なり。村々より苅かりに行く。ある年の秋飯豊村の者ども萱を苅るとて、

岩穴の中より狼の子三匹を見出し、その二つを殺し一つを持ち帰りし

に、その日より狼の飯豊衆の馬を襲おそうことやまず。外の村々の人馬には

いささかも害をなさず。飯豊衆相談して狼狩をなす。その中には相撲すもう

を取り平生力自慢へいぜいちからじまんの者あり。さて野に出でて見るに、雄おすの狼は遠くに

おりて来きたらず。雌狼めす一つ鉄という男に飛びかかりたるを、ワツポロ

を脱ぎて腕うでに巻き、やにわにその狼の口の中に突き込みしに、狼これを噛む。なお強く突き入れながら人を喚よぶに、誰も誰も怖おそれて近よらず。その間に鉄の腕は狼の腹まで入り、狼は苦しまぎれに鉄の腕骨を噛み砕くだきたり。狼はその場にて死したれども、鉄も担かつがれて帰り程ほどなく死したり。

○ワツポロは上羽織のことなり。

四三

四八

一昨年かみごうの『遠野新聞』にもこの記事を載せたり。上郷村の熊

という男、友人とともに雪の日に六角牛に狩に行き谷深く入りしに、熊の足跡を見出でたれば、手分てわけしてその跡を覓もとめ、自分は峯の方を行きしに、とある岩の陰かげより大なる熊此方を見る。矢頃やころあまりに近かりしかば、銃をすてて熊に抱かかえつき雪の上を転ころびて、谷へ下る。連つれの男これを救わんと思えども力及ばず。やがて谷川に落ち入りて、人の熊下したになり水に沈みたりしかば、その隙ひまに獣の熊を打ち取りぬ。水にも溺おほれず、爪つめの傷は数ヶ所受けたれども命に障さわることはなかりき。

四四

四九

六角牛の峯続きにて、橋野はしのという村の上なる山に金坑きんこうあり。

この鉾山のために炭を焼きて生計とする者、これも笛の上手にて、あ
 る日昼ひるの間あいだこや小屋におり、仰向あおもむきに寝転びて笛を吹きてありしに、小屋の
 口なる垂菰たれこもをかかぐる者あり。驚きて見れば猿の経立ふつたちなり。恐ろしく
 て起き直りたれば、おもむろに彼方かなたへ走り行きぬ。

○上閉伊郡栗橋村大字橋野。

五〇

四五 猿の経立ふつたちはよく人に似て、女色を好み里の婦人を盗み去るこ
 と多し。松脂まつやにを毛に塗り砂をその上につけておる故、毛皮けがわは鎧よろいのごと
 く鉄砲てつぱうの弾たまも通とおらず。

五一

四六 栃内村はちうちの林崎はやしに住む何某という男、今は五十に近し。十年あ
 まり前のことなり。六角牛山に鹿を撃ちに行き、オキを吹きたりしに、
 猿の経立あり、これを真まことの鹿なりと思ひしか、地竹じだけを手にて分わけなが
 ら、大なる口をあけ嶺たけの方より下くだり来たれり。胆潰きもつぶれて笛を吹きやめ
 たれば、やがて反それて谷の方へ走り行きたり。

○オキとは鹿笛のことなり。

五二

四七 この地方にて子供をおどす言葉ことばに、六角牛の猿の経立が来る

ぞということ常の事なり。この山には猿多し。緒持おがせの滝たきを見に行けば、崖がけの樹こすえの梢こすえにあまたおり、人を見れば遁にげながら木の実みなどを擲なげうちて行くなり。

四八 五三 せんにとうげ 仙人峠せんにとうげにもあまた猿おりて行人たわむに戯たわむれ石を打ちつけなぞす。

四九 五四 仙人峠せんにとうげは登り十五里くだ降り十五里あり。その中ほどに仙人の像を祀りたる堂あり。この堂の壁かべには旅人かべがこの山中にて遭あひたる不思議の出来事を書き識しるすこと昔むかしよりの習ならいなり。例えば、我は越後の者なるが、何月何日の夜、この山路やまみちにて若き女の髪を垂たれたるに逢あえり。こちらを見てにこと笑わらいたりという類たぐいなり。またこの所にて猿いたすに悪戯いたすをせられたりとか、三人の盗賊に逢あえりというようなる事をも記しるせり。

○この一里も小道なり。

五〇 五五 しすけ 死助しすけの山にカツコ花あり。遠野郷にても珍めづしという花なり。

五月かんどり閑古鳥かんどりの啼なくころ、女や子どもこれを採とりに山へ行く。酢すの中に漬つけて置おけば紫色むらさきいろになる。酸漿ほおすきの実みのように吹ふきて遊あそぶなり。この花を採とることは若き者の最も大なる遊あそ楽なり。

五五 山にはさまざまの鳥住めど、最も寂しき声の鳥はオット鳥な

り。夏の夜中に啼く。浜の大槌より駄賃附の者など峠を越え来たれば、

遙はるか

に谷底にてその声を聞くといえり。昔ある長者の娘あり。またある

長者の男の子と親したしみ、山に行きて遊びしに、男見えずなりたり。夕

暮になり夜になるまで探さがしあるきしが、これを見つくることをえずし

て、ついにこの鳥になりたりという。オットーン、オットーンという

は夫おつとのことなり。末の方かすれてあわれなる鳴声なり。

五二 馬追鳥うまおいどりは時鳥ほととぎすに似て少し大きく、羽はねの色は赤に茶を帯おび、肩

には馬の綱つなのような縞しまあり。胸のあたりにクツゴコ（口籠）のよう

なるかたあり。これも或ある長者が家の奉公人、山へ馬を放はなしに行き、

家に帰らんとするに一匹不足せり。夜通しこれを求めあるきしがつい

にこの鳥となる。アーホー、アーホーと啼くはこの地方にて野におる

馬を追う声なり。年により馬追鳥里さとにきて啼くことあるは飢饉ききんの前兆

なり。深山には常に住みて啼く声を聞くなり。

○クツゴコは馬の口に嵌はめる綱の袋なり。

五八

五三 郭公かつこうと時鳥ほととぎすとは昔あねいもとありし姉妹あねいもとなり。郭公は姉あねいもとなるがある時芋いも

を掘りて焼き、そのまわりの堅かたきところを自ら食くい、中の軟やわらかなると

ころを妹に与たまへたりしを、妹は姉の食くう分ぶんは一層うま旨うまかるべしと想おもいて、

庖丁ほうちよう

にてその姉を殺せしに、たちまちに鳥となり、ガンコ、ガンコと

啼なきて飛び去りぬ。ガンコは方言にて堅かたいところということなり。妹

さてはよきところをのみおのれにくれしなりけりと思おもい、悔恨くわんに堪たえ

ず、やがてまたこれも鳥になりて庖丁ほうちようかけたと啼なきたりという。遠野

にては時鳥のことを庖丁ほうちようかけと呼ぶ。盛岡もりおか辺にては時鳥はどちやへ飛

んでたと啼なくという。

○この芋は馬鈴薯ばれいしょのことなり。

五九

五四 閉伊川へいがわの流れながには淵ふち多く恐おそろしき伝説でんせつ少なからず。小国川と

の落合おちあに近ちかきところに、川井かわいという村あり。その村の長者ちやうじやの奉公人ほうこうにん、

ある淵の上なる山にて樹を伐きるとて、斧おのを水中みづに取り落おしたり。主人

の物なれば淵に入りてこれを探さぐりしに、水の底そこに入るまままに物音ものね聞きゆ。

これを求めて行くに岩の陰かげに家あり。奥おくの方に美はしき娘機むすめはたを織おりてい

たり。そのハタシに彼の斧は立てかけてありたり。これを返したまわらんとする時、振り返りたる女の顔を見れば、二三年前に身まかりたる我が主人の娘なり。斧は返すべければ我がこの所ところにあることを人というな。その礼としてはその方しんしょうよ身上良くなり、奉公をせずともすむようにして遣やらんといいたり。そのためなるか否かは知らず、その後どうびき胸引などという博奕ばくちに不思議に勝ち続けつづて金溜りかねたま、ほどなく奉公をやめ家に引き込みて中ちゆうぐらいの農民になりたれど、この男は疾とくに物忘れして、この娘のいいしことも心づかずしてありしに、或る日同じ淵ほとりの辺を過ぎて町へ行くとて、ふと前の事を思い出し、伴ともなえる者に以前かかることありきと語りしかば、やがてその噂うわさは近郷に伝わりぬ。その頃より男は家産再び傾かたむき、また昔の主人に奉公して年を経たり。家の主人は何と思ひしにや、その淵なんがに何荷なんがともなく熱湯を注そそぎ入れなどしたりしが、何の効もなかりしとのことなり。

五五 六〇 ○下閉伊郡川井村大字川井、川井はもちろん川合の義なるべし。
川には川童かわっば多く住めり。猿ヶ石川ことに多し。松崎村の川端かわばた

の家にて、二代まで続けて川童の子を孕みたる者あり。生れし子は斬り刻みて一升樽に入れ、土中に埋めたり。その形きわめて醜怪なるものなりき。女の婿の里は新張村の何某とて、これも川端の家なり。その主人人にその始終を語れり。かの家の者一同ある日畠に行きて夕方に帰らんとするに、女川の汀に踞りてにこにこと笑いてあり。次の日は昼の休みにまたこの事あり。かくすること日を重ねたりしに、次第にその女のところへ村の何某という者夜々通うという噂立ちたり。始めには婿が浜の方へ駄賃附に行きたる留守をのみ窺いたりしが、のちには婿と寝たる夜さえるようになれり。川童なるべしという評判だんだん高くなりたれば、一族の者集まりてこれを守れどもなんの甲斐もなく、婿の母も行きて娘の側に寝たりしに、深夜にその娘の笑う声を聞きて、さては来てありと知りながら身動きもかなわず、人々いかにともすべきようなかりき。その産はきわめて難産なりしが、或る者のいうには、馬槽に水をたたえその中にて産まば安く産まるべしとのこにて、これを試みたれば果してその通りなりき。その子は手に水掻

あり。この娘の母もまたかつて川童の子を産みしことありという。二代や三代の因縁にはあらずという者もあり。この家も如法の豪家にて何の某という土族なり。村会議員をしたることもあり。

五六 六二 上郷村の何某の家にて川童らしき物の子を産みたることあり。確なる証とはなけれど、身内真赤にして口大きく、まことにいやな子なりき。忌わしければ棄てんとてこれを携えて道ちがえに持ち行き、そこに置いて一間ばかりも離れたりしが、ふと思ひ直し、惜しきものなり、売りに見せ物にせば金になるべきにとて立ち帰りたるに、早取り隠されて見えざりきという。

○道ちがえは道の二つに別かるところすなわち追分なり。

五七 六二 川の岸の砂の上には川童の足跡というものを見ること決して珍しからず。雨の日の翌日などはことにこの事あり。猿の足と同じく親指は離れて人間の手の跡に似たり。長さは三寸に足らず。指先のあとは人ののように明らかに見えずという。

五八 六三 小鳥瀬川の姥子淵の辺に、新屋の家という家あり。ある日淵

へ馬を冷しに行き、馬曳の子は外へ遊びに行きし間に、川童出でてその馬を引き込まんとし、かえりて馬に引きずられて厩の前に来たり、馬槽に覆われてありき。家のももの馬槽の伏せてあるを怪しみて少しあけて見れば川童の手出でたり。村中のももの集まりて殺さんか宥さんかと評議せしが、結局今後は村中の馬に悪戯をせぬという堅き約束をさせてこれを放したり。その川童今は村を去りて相沢の滝の淵に住めりという。

○この話などは類型全国に充満せり。いやしくも川童のおるといふ国には必ずこの話あり。何の故にか。

六四

五九 外の地にては川童の顔は青しというようなれど、遠野の川童

は面の色赭きなり。佐々木氏の曾祖母、穉かりしころ友だちと庭にて

遊びてありしに、三本ばかりある胡桃の木の間より、真赤なる顔した

る男の子の顔見えたり。これは川童なりしとなり。今もその胡桃大木にてあり。この家の屋敷のめぐりはすべて胡桃の樹なり。

六五

六〇 和野村の嘉兵衛爺、雉子小屋に入りて雉子を待ちしに狐しば

しば出でて雉子を追う。あまり憎ければこれを撃たんと思ひ狙いたるに、狐は此方を向きて何ともなげなる顔してあり。さて引金を引きたれども火移らず。胸騒ぎして銃を検せしに、筒口より手元のところまでいつのまにかことごとく土をつめてありたり。

六一 六六 同じ人六角牛に入りて白き鹿に逢えり。白鹿は神なりといひい伝えあれば、もし傷つけて殺すこと能わずば、必ず祟あるべしと思案せしが、名譽の獵人なれば世間の嘲りをいとい、思ひ切りてこれを撃つに、手応えはあれども鹿少しも動かず。この時もいたく胸騒ぎして、平生魔除けとして危急の時のために用意したる黄金の丸を取り出し、これに蓬を巻きつけて打ち放したれど、鹿はなお動かず、あまり怪しければ近よりて見るに、よく鹿の形に似たる白き石なりき。数年の間山中に暮せる者が、石と鹿とを見誤るべくもあらず、全く魔障の仕業なりけりと、この時ばかりは獵を止めばやと思いたりきという。

六二 六七 また同じ人、ある夜山中にて小屋を作るいとまなくて、とある大木の下に寄り、魔除けのサンズ繩をおのれと木のめぐりに三囲引

きめぐらし、鉄砲を豎に抱えてまどろみたりしに、夜深く物音のするに心づけば、大なる僧形の者赤き衣を羽のように羽ばたきして、その木の梢に蔽いかかりたり。すわやと銃を打ち放せばやがてまた羽ばたきして中空を飛びかえりたり。この時の恐ろしさも世の常ならず。前後三たびまでかかる不思議に遭い、そのたびごとに鉄砲を止めんと心に誓い、氏神に願掛けなどすれど、やがて再び思い返して、年取るまで獵人の業を棄つること能わずとよく人に語りたり。

六三六八 小国の三浦某というは村一の金持なり。今より二三代前の主人、まだ家は貧しくして、妻は少しく魯鈍なりき。この妻ある日門の前を流るる小さき川に沿いて蕨を採りに入りしに、よき物少なければ次第に谷奥深く登りたり。さてふと見れば立派なる黒き門の家あり。訝しけれど門の中に入りて見るに、大なる庭にて紅白の花一面に咲きいぶか鶏多く遊べり。その庭を裏の方へ廻れば、牛小屋ありて牛多くおり、馬舎ありて馬多くおれども、一向に人はおらず。ついに玄関より上りたるに、その次の間には朱と黒との膳椀をあまた取り出したり。奥の

座敷には火鉢ありて鉄瓶の湯のたぎれるを見たり。されどもついに人影はなければ、もしや山男の家ではないかと急に恐ろしくなり、駆け出して家に帰りたり。この事を人に語れども実と思ふ者もなかりしが、また或る日わが家のカドに出でて物を洗いてありしに、川上より赤き椀一つ流れてきたり。あまり美しければ拾い上げたれど、これを食器に用いたらば汚しと人に叱られんかと思ひ、ケセネギツの中に置いてケセネを量る器となしたり。しかるにこの器にて量り始めてより、いつまで経ちてもケセネ尽きず。家の者もこれを怪しみて女に問いたるとき、始めて川より拾い上げし由を語りぬ。この家はこれより幸運に向い、ついに今の三浦家となれり。遠野にては山中の不思議なる家をマヨイガという。マヨイガに行き当りたる者は、必ずその家の内の什器家畜何にてもあれ持ち出でて来べきものなり。その人に授けんがためにかかる家をば見するなり。女が無慾にて何ものをも盗み来ざりしが故に、この椀自ら流れて来たりしなるべしといえり。

○このカドは門にはあらず。川戸にて門前を流るる川の岸に水を汲

み物を洗うため家ごとに設けたるところなり。

○ケセネは米稗ひえその他の穀物こくもつをいう。キツはその穀物を容いる箱なり。大小種々のキツあり。

六九

かねさわむら

金沢村は白望しろみの麓ふもと、

上閉伊郡の内にててもことに山奥にて、人

の往来する者少なし。六七年前この村より栃内村の山崎なにかしなる某かかが家に娘の婿を取りたり。この婿実家に行かんとして山路に迷い、またこのマヨイガに行き当りぬ。家のありさま、牛馬雞の多きこと、花の紅白に咲きたりしことなど、すべて前の話の通りなり。同じく玄関に入りしに、膳ぜん椀を取り出したる室あり。座敷に鉄瓶てつびんの湯たぎりて、今まさに茶を煮にんとするところのように見え、どこか便所などのあたり人が立ちてあるようにも思われたり。茫然ぼうぜんとして後にはだんだん恐ろしくなり、引き返してついに小国おぐにの村里に出でたり。小国にてはこの話を聞まきて実まこととする者もなかりしが、山崎の方にてはそはマヨイガなるべし、行きて膳椀ぜんわんの類を持ち来きたり長者にならんとて、婿殿むこどのを先に立てて人あまたこれを求めに山の奥に入り、ここに門ありきという

ところに来たれども、眼にかかるものもなく空しく帰りに来たりぬ。その婿もついに金持になりたりということを見聞かず。

○上閉伊郡金沢村。

六五 七〇 早池峯は御影石の山なり。この山の小国に向きたる側に安倍ヶ城という岩あり。険しき崖の中ほどにありて、人などはとても行きうべきところにあらず。ここには今でも安倍貞任の母住めりと言ひ伝う。雨の降るべき夕方など、岩屋の扉を鎖す音聞ゆという。小国、附馬牛の人々は、安倍ヶ城の錠の音がする、明日は雨ならんなどいう。

六六 七二 同じ山の附馬牛よりの登り口にもまた安倍屋敷という巖窟あり。とにかく早池峯は安倍貞任にゆかりある山なり。小国より登る山口にも八幡太郎の家来の討死したるを埋めたりという塚三つばかりあり。

六七 七三 安倍貞任に関する伝説はこのほかにも多し。土淵村と昔は橋野といひし栗橋村との境にて、山口よりは二三里も登りたる山中に、広く平なる原あり。そのあたりの地名に貞任ということところあり。沼あり

て貞任が馬を冷せしところなりという。貞任が陣屋を構えし址とも言い伝う。景色よきところにて東海岸よく見ゆ。

六八七三 土淵村には安倍氏という家ありて貞任が末なりという。昔は

栄えたる家なり。今も屋敷の周囲には堀ありて水を通ず。刀剣馬具あ

またあり。当主は安倍与右衛門、今も村にては二三等の物持ちにて、村

会議員なり。安倍の子孫はこのほかにも多し。盛岡の安倍館の附近に

もあり。厨川の柵に近き家なり。土淵村の安倍家の四五町北、小烏瀬川

の河隈に館の址あり。八幡沢の館という。八幡太郎が陣屋というもの

これなり。これより遠野の町への路にはまた八幡山という山ありて、そ

の山の八幡沢の館の方に向かえる峯にもまた一つの館址あり。貞任が

陣屋なりという。二つの館の間二十余町を隔つ。矢戦をしたりという

言い伝えありて、矢の根を多く掘り出せしことあり。この間に似田貝

という部落あり。戦の当時このあたりは蘆しげりて土固まらず、ユキユ

キと動揺せり。或る時八幡太郎ここを通りしに、敵味方いずれの兵糧

にや、粥を多く置きてあるを見て、これは煮た粥かといひしより村の

名となる。似田貝の村の外を流るる小川を鳴川なるかわという。これを隔てて足洗川あしらがむら村あり。鳴川にて義家よしいえが足を洗いしより村の名となるという。

○ニタカイはアイヌ語のニタトすなわち湿地より出しなるべし。地形よく合えり。西の国々にてはニタともヌタともいう皆これなり。

下閉伊郡小川村にも二田貝という字あり。

七四

六九 今の土淵村には大同だいたうという家二軒あり。山口の大同は当主をおおほらまんのじょう大洞万之丞おほほらまんのじょうという。この人の養母名はおひで、八十を超こえて今も達者なり。佐々木氏の祖母の姉なり。魔法に長じたり。まじないにて蛇を殺し、木に止とまれる鳥を落しなどするを佐々木君はよく見せてもらいたり。昨年こぞの旧暦正月十五日に、この老女の語りしには、昔あるところに貧しき百姓あり。妻はなくて美しき娘あり。また一匹の馬を養う。娘この馬を愛して夜よみになれば厩舎うまやに行きて寝いね、ついに馬と夫婦になれり。或る夜父はこの事を知りて、その次の日に娘には知らせず、馬を連れ出して桑の木につり下げて殺したり。その夜娘は馬のおらぬより父に尋ねてこの事を知り、驚き悲しみて桑の木の下に行き、死したる馬の首

に縫^{すが}りて泣きいたりしを、父はこれを悪^{にく}みて斧をもつて後^{うしろ}より馬の首を切り落せしに、たちまち娘はその首に乗りたるまま天^{のぼ}に昇り去れり。オシラサマというはこの時より成りたる神なり。馬をつり下げたる桑の枝にてその神の像を作る。その像三つありき。本^{もと}にて作りしは山口の大同にあり。これを姉神とす。中にて作りしは山崎^{ざいけこんじゅうろう}の在家権十郎という人の家にあり。佐々木氏の伯母^{おば}が縁づきたる家なるが、今は家絶えて神の行方^{ゆくえ}を知らず。末^{すえ}にて作りし妹神の像は今附馬牛村にありといえり。

七五

七〇 同じ人の話に、オクナイサマはオシラサマのある家には必ず伴^{いと}ないて在^{いま}す神なり。されどオシラサマはなくてオクナイサマのみある家もあり。また家によりて神の像も同じからず。山口の大同にあるオクナイサマは木像なり。山口の辻^{はねいし}石たにえという人の家なるは掛軸^{かけじく}なり。田圃^{たんぼ}のうち^{うち}にいませるはまた木像なり。飯^{いいで}豊の大同にもオシラサマはなけれどオクナイサマのみはいませりという。

七六

七一 この話をしたる老女は熱心なる念仏者なれど、世の常の念仏

者とは様さまかわり、一種邪宗らしき信仰あり。信者に道を伝うることはあれども、互いに嚴重なる秘密を守り、その作法さほうにつきては親にも子にもいささかたりとも知らしめず。また寺とも僧とも少しも関係はなくて、在家ざいけの者のみの集まりなり。その人の数も多からず。辻石はねいしたにえという婦人などは同じ仲間なり。阿弥陀仏あみだぶつの齋日さいにちには、夜中人の静まるを待ちて会合し、隠れたる室にて祈祷きとうす。魔法まじないを善よくする故に、郷党きやうたうに対して一種の権威あり。

七七

七二 栃内村とちないの字琴畑ことばたは深山の沢にあり。家の数は五軒ばかり、小鳥瀬川こがらせの支流の水みな上なり。これより栃内の民居まで二里を隔へだつ。琴畑の入口に塚あり。塚の上には木の座像ざぞうあり。およそ人の大きさにて、以前は堂の中にありしが、今は雨あまざらしなり。これをカクラサマという。村の子供こどもこれを玩物もてあそびものにし、引き出して川へ投げ入れまた路上を引きずりなどする故に、今は鼻も口も見えぬようになれり。或あるいは子供こどもを叱しかり戒めてこれを制止する者あれば、かえりて祟たたりを受け病むことありといえり。

○神体仏像子供と遊ぶを好みこれを制止するを怒りたもうことほかにも例多し。遠江小笠郡大池村東光寺の薬師仏（『掛川志』）、駿河安倍郡豊田村曲金の軍陣坊社の神（『新風土記』）、または信濃筑摩郡射手の弥陀堂みだどうの木仏（『信濃奇勝録』）などこれなり。

七三 七八 カクラサマの木像は遠野郷のうちに数多あり。栃内の字西内にしないにもあり。山口分の大洞おおほらというところにもありしことを記憶する者あり。カクラサマは人のこれを信仰する者なし。粗末なる彫刻にて、衣裳頭いしょうかしらの飾かざりのありさまも不明なり。

七四 七九 栃内のカクラサマは右の大小二つなり。土淵一村にては三つか四つあり。いずれのカクラサマも木の半身像にてなたの荒削りあらけずの無恰好ぶかつこうなるものなり。されど人の顔なりということだけは分わかるなり。カクラサマとは以前は神々の旅をして休息したもうべき場所の名なりしが、その地に常つねにいます神をかく唱となうることとなれり。

七五 八〇 はなれもり 離森はなれもりの長者屋敷にはこの数年前まで燐寸マツチの軸木じくぎの工場こうばありたり。その小屋の戸口に夜よるになれば女の伺かこい寄りて人を見てげたげたと

笑う者ありて、淋しさに堪えざる故、ついに工場を大字山口に移したり。その後また同じ山中に枕木伐出しのために小屋をかけたる者ありしが、夕方になると人夫の者いずれへか迷い行き、帰りてのち茫然としてあることしばしばなり。かかる人夫四五人もありてその後も絶えず何方へか出でて行くことありき。この者どもが後に言うを聞けば、女がきて何処へか連れだすなり。帰りてのちは二日も三日も物を覚えずといえり。

七六 八一 長者屋敷は昔時長者の住みたりし址なりとて、そのあたりにも糠森ぬかもりという山あり。長者の家の糠を捨てたるがなれるなりという。この山中には五つ葉いっばのうつ木ありて、その下に黄金を埋めてありとて、今もそのうつぎの有処あつかを求めあるく者稀まれ々にあり。この長者は昔の金山師なりしならんか、このあたりには鉄を吹きたる滓かすあり。恩徳の金山もこれより山続きにて遠からず。

○諸国のヌカ塚スクモ塚には多くはこれと同じき長者伝説を伴なえり。また黄金埋蔵の伝説も諸国に限りなく多くあり。

七七 八二 山口の田尻長三郎たじりというは土淵村一番の物持ものもちなり。当主なる

老人の話に、この人四十あまりのころ、おひで老人の息子亡くなりて葬式の夜、人々念仏を終りおのおの帰り行きし跡あとに、自分のみは話好きはなしずなれば少しあとになりて立ち出でしに、軒の雨落ちの石を枕あまおにしてぎようが仰臥したる男あり。よく見れば見も知らぬ人にて死してあるようなり。月のある夜なればその光にて見るに、膝ひざを立て口を開きてあり。この人大胆者にて足にて揺うごかして見たれど少しも身じろぎせず。道を妨さまたげて外ほかにせん方もなければ、ついにこれを跨またぎて家に帰りたり。次の朝行きて見ればもちろんその跡方もなく、また誰ほかも外ほかにこれを見たりという人はなかりしかど、その枕にしてありし石の形と在ありどころとは昨夜の見覚えみおぼの通りなり。この人の曰く、手をかけて見たらばよかりしに、半ばなか恐ろしければただ足にて触ふれたるのみなりし故、さらに何ものわざとも思いつかずと。

七八 八三 同じ人の話に、家に奉公せし山口の長蔵なる者、今も七十余の老翁にて生存す。かつて夜遊びに出でて遅くかえり来たりしに、主

人の家の門は大槌おおづち往還ゆきがたに向いて立てるが、この門の前にて浜の方よりくる人に逢えり。雪合羽ゆきがっぱを着たり。近づきて立ちとまる故、長蔵も怪しみてこれを見たるに、往還を隔てて向側なる畠地の方へすつと反それて行きたり。かしこには垣根かきねありしはずなるにと思ひて、よく見れば垣根は正まぎしくあり。急に怖ろしくなりて家の内に飛び込み、主人にこの事を語りしが、のちになりて聞けば、これと同じ時刻にいばりむらに新張村の何某なにかという者、浜よりの帰り途みちに馬より落ちて死したりとのことなり。

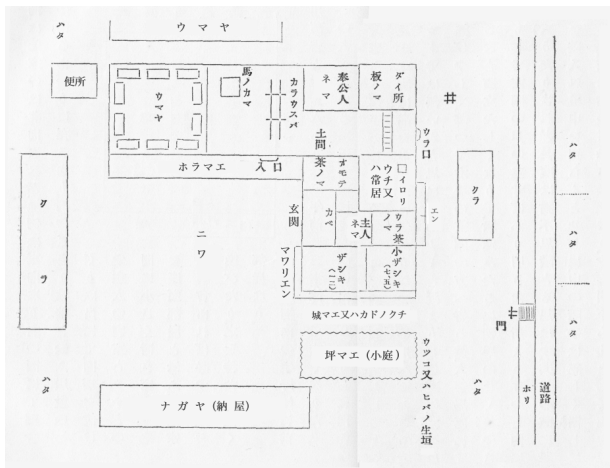
七九八四 この長蔵の父をもまた長蔵という。代々田尻家の奉公人にて、その妻とともに仕えてありき。若きころ夜遊よあそびびに出で、まだ宵よいのうちうちに帰り来たり、門かどの口くちより入りしに、洞前ほらまえに立てる人影あり。懐手ふたていしうでをして筒袖つつそでの袖口を垂れ、顔は茫ぼうとしてよく見えず。妻は名をおつねといえり。おつねのところへ来たるヨバヒトではないかと思ひ、つかつかと近よりしに、奥の方へは遁にげずして、かえつて右手の玄関の方へ寄る故、人を馬鹿にするなど腹立たしくなりて、なお進みたるに、懐手あのまま後あとずさりして玄関の戸の三寸ばかり明きたるところより、すつ

と内に入りたり。されど長蔵はなお不思議とも思わず、その戸の隙すきに手を差し入れて中を探らんとせしに、中の障子しょうじは正ましく閉とじてあり。ここに始めて恐ろしくなり、少し引き下らんとして上を見れば、今の男玄関くもかべの雲壁くもかべにひたとつきて我を見下すごとく、その首は低く垂たれてわが頭に触るるばかりにて、その眼の球は尺余も、抜け出でてあるように思われたりという。この時はただ恐ろしかりしのみにて何事の前兆しるしにてもあらざりき。

○ヨバヒトは呼ばい人なるべし。女に思いを運ぶ人をかくいう。

○雲壁はなげしの外側の壁なり。

遠野物語



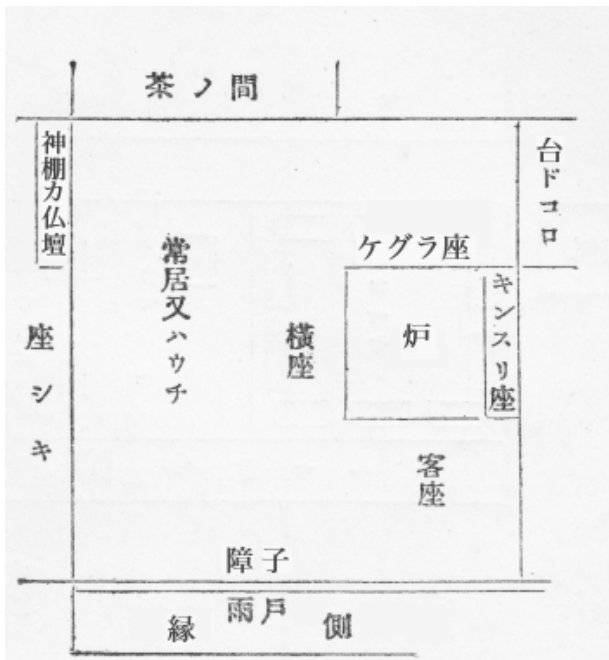
八〇 八五 右の話をよく呑みこむためには、田尻氏の家のさまを図にす

る必要あり。遠野一郷の家の建てかたはいずれもこれと大同小異なり。門はこの家のは北向きなれど、通例は東向きなり。右の図にて厩舎のあるあたりにあるなり。門のことを城前じょうまえという。屋敷やしきのめぐりは畠にて、囲墻いしやうを設けず。主人の寢室とウチとの間に小さく暗き室あり。これを座頭ざとう部屋べやという。昔は家に宴会あれば必ず座頭を喚よびたり。これを待たせ置く部屋なり。

○この地方を旅行して最も心とまるは家の形の何れいずもかぎの手なることなり。この家などそのよき例なり。

八一 八六 栃内の字野崎のざきに前川万吉という人あり。二三年前に三十余に

て亡くなりたり。この人も死ぬる二三年前に夜遊びに出でて帰りしに、門かどの口くちより廻り縁えんに沿かどいてその角かどまで来たるとき、六月の月夜のことなり、何心なにしころなく雲壁くもかべを見れば、ひととこれにつきて寝たる男あり。色の蒼あおざめたる顔なりき。大いに驚きて病みたりしがこれも何の前兆ぜんせうにてもあらざりき。田尻氏の息子丸吉この人と懇親こんしんにてこれを聞きたり。

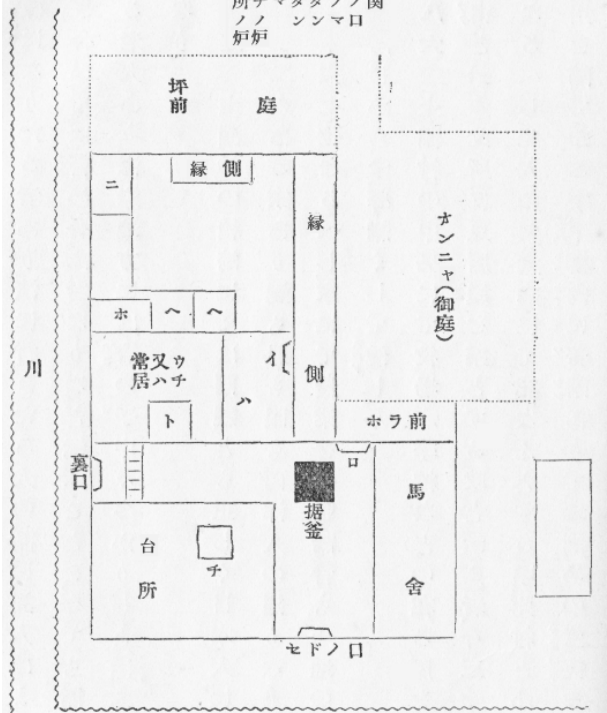


八二 八七 これは田尻丸吉という人が自ら遭いたることなり。少年の頃

ある夜常居じょういより立ちて便所に行かんとして茶の間に入りしに、座敷ざしきとの境に人立てり。幽かすかに茫まとしてはあれど、衣類しの縞しまも眼鼻もよく見え、髪をば垂たれたり。恐ろしけれどそこへ手を延ばして探りしに、板戸にがたと突き当り、戸のさんにも触さわりたり。されどわが手は見えずして、その上に影のように重かさなりて人の形あり。その顔のところへ手を遣やればまた手の上に顔見ゆ。常居じょういに帰りて人々に話し、行灯あんどんを持ち行きて見たれば、すでに何ものもあらざりき。この人は近代的人にて怜悧れいりなる人なり。また虚言をなす人にもあらず。

八三 八八 山口の大同、大洞万之丞おおほらまんのじょうの家の建てざまは少しく外ほかの家とはかわれり。その図次のページに出す。玄関たつみは巽たつみの方に向かえり。きわめて古き家なり。この家には出して見れば崇たありとて開かざる古文書つづらの葛籠つづら一つあり。

チトヘホニハロイ
 台ウ寝仏仏茶前玄
 所チマダダノノ関
 ノノンマ口
 炉



オンニヤ(御庭)

川

裏口

ホラ前

馬舎

セドノ口

川

八四 八九 佐々木氏の祖父は七十ばかりにて三四年前に亡くなりし人な

り。この人の青年のころといえ、かえい嘉永の頃なるべきか。海岸の地には西洋人あまた来住してありき。かまいし釜石にも山田にも西洋館あり。ふなこし船越の半島の突端にも西洋人の住みしことあり。耶蘇教は密々に行われ、遠野郷にてもこれを奉じてはりつけ磔になりたる者あり。浜に行きたる人の話に、異人はよく抱き合いては嘗め合なう者なりなどいうことを、今でも話にする老人あり。海岸地方には合あいの子こなかなか多かりしということなり。

八五 九〇 土淵村の柏崎かしわぎにては両親とも正ましく日本人にして白子しらこ二人ある家あり。髪も肌も眼も西洋人の通りなり。今は二十六七ぐらいなるべし。家にて農業を営いとなむ。語音も土地の人とは同じからず、声細くして鋭すずみし。

八六 九一 土淵村の中央にて役場小学校などのあるところを字本宿もとじゆくとい

う。此所に豆腐屋とうふやを業とする政せいという者、今三十六七なるべし。この人の父大病にて死なんとするころ、この村と小鳥瀬川こがらせを隔てたる字下栃内しもとぢない

に普請ふしんありて、地固めの堂突どうつきをなすところへ、夕方に政の父ひとり来たりて人々に挨拶あいさつし、おれも堂突をなすべしとて暫時仲間に入りて仕事をなし、やや暗くなりて皆とともに帰りたり。あとにて人々あの人は大病のはずなるにと少し不思議に思いしが、後に聞けばその日亡くなりたりとのことなり。人々悔みに行き今日のことを語りしが、その時刻はあたかも病人が息を引き取らんとするころなりき。

九二

八七 人の名は忘れたれど、遠野の町の豪家にて、主人大煩おわわずらいして命の境に臨みしころ、ある日ふと菩提寺ぼだいじに訪い来たれり。和尚おしょう鄭重ていじゆうにあしらい茶などすすめたり。世間話せけんわなしをしてやがて帰らんとする様子に少々不審あれば、跡より小僧を見せに遣りしに、門を出でて家の方に向い、町の角かどを廻りて見えすなれり。その道にてこの人に逢いたる人まだほかにもあり。誰にもよく挨拶して常つねの体ていなりしが、この晩に死去してもちろんその時は外出などすべき様態ようたいにてはあらざりしなり。後に寺にては茶は飲んだりや否やと茶碗を置きしところを改めしに、畳たたみの敷合しきあわせへ皆こぼしてありたり。

八八九三 これも似たる話なり。土淵村大字土淵の常堅寺じょうけんじは曹洞宗そうとうしゅうにて、

遠野郷十二ヶ寺の触頭ふれがしらなり。或る日の夕方に村人何某なにがしという者、本宿もとじゆくより来る路にて何某なにがしという老人にあえり。この老人はかねて大病をして居る者なれば、いつのまによくになりしやと問うに、二三日気分も宜よろしければ、今日は寺へ話を聞きに行くなりとて、寺の門前にてまた言葉ことばを掛け合いて別れたり。常堅寺にても和尚はこの老人が訪ね来たりし故出迎えゆえ、茶を進めしばらく話をして帰る。これも小僧に見させたるに門の外そとにて見えずなりしかば、驚きて和尚に語り、よく見ればまた茶は畳の間にこぼしてあり、老人はその日失うせたり。

八九九四 山口より柏崎へ行くには愛宕山あたごやまの裾すそを廻まわるなり。田圃たんぼに続け

る松林にて、柏崎の人家見ゆる辺より雑木ぞうきの林となる。愛宕山あたごやまの頂いただきには小さき祠ほこらありて、参詣さんげいの路は林の中にあり。登口のぼりぐちに鳥居とりい立ち、二三十本の杉の古木あり。その旁かたわらにはまた一つのがらんとしたる堂あり。

堂の前には山神の字を刻みたる石塔を立つ。昔より山の神出づと言い伝うるところなり。和野わのの何某なにがしという若者、柏崎に用事ありて夕方堂

のあたりを通りしに、愛宕山の上より降り来る丈高き人あり。誰ならんと思ひ林の樹木越しにその人の顔のところを目がけて歩み寄りしに、道の角にてはたと行き逢いぬ。先方は思ひ掛けざりしにや大いに驚きて此方を見たる顔は非常に赤く、眼は耀きてかついかにも驚きたる顔なり。山の神なりと知りて後をも見ずに柏崎の村に走りつきたり。

○遠野郷には山神塔多く立てり、そのところはかつて山神に逢いまたは山神の祟を受けたる場所にて神をなだむるために建てたる石なり。

九五

九十 松崎村に天狗森てんぐもりという山あり。その麓なる桑島くわはたけにて村の若者何某くろという者、働きていたりしに、頻しきりに睡ねむくなりたれば、しばらく畠の畔くろに腰掛けて居眠りいねむせんとせしに、きわめて大なる男の顔は真赤まっかなるが由で来たれり。若者は気軽にて平生相撲へいぜすもうなどの好きなる男なれば、この見馴れぬ大男が立ちはだかりて上より見下すようなるを面悪つらくく思ひ、思わず立ち上りてお前はどこから来たかと問うに、何の答えもせざれば、一つ突き飛ばしてやらんと思ひ、力自慢ちからじまんのまま飛びかかり手

を掛けたりと思うや否や、かえりて自分の方が飛ばされて気を失いたり。夕方に正気づきてみれば無論その大男はおらず。家に帰りてのち人にこの事を話したり。その秋のことなり。早池峯の腰へ村人大勢とともに馬を曳ひきて萩はぎを刈りに行き、さて帰らんとするころになりてこの男のみ姿見えず。一同驚きて尋ねたれば、深き谷の奥にて手も足も一つ一つ抜き取られて死していたりという。今より二三十年前のことにて、この時の事をよく知れる老人今も存在せり。天狗森には天狗多くいるということは昔より人の知るところなり。

九六

九一 遠野の町に山々の事に明るき人あり。もとは南部男爵家の鷹匠たかじょうなり。町の人綽名あだなして鳥御前とりごぜんという。早池峯、六角牛の木や石や、すべてその形状と在処ありどころとを知れり。年取りてのち茸採きのことりにとて一人の連つれとともに出でたり。この連の男というは水練の名人にて、藁わらと槌つちとを持ちて水の中に入り、草鞋わらじを作りて出てくるという評判の人なり。さて遠野の町と猿ヶ石川を隔つる向山むけえやまという山より、綾織村あやおりの続石つづきいしとて珍しき岩のある所の少し上の山に入り、兩人別れ別れになり、鳥御前

一人はまた少し山を登りしに、あたかも秋の空の日影、西の山の端より四五間ばかりなる時刻なり。ふと大なる岩の陰に赭き顔の男と女とが立ちて何か話をして居るに出逢いたり。彼らは鳥御前の近づくを見て、手を拵げて押し戻すようなる手つきをなし制止したれども、それにも構わず行きたるに女は男の胸に縋るようになりたり。事のさまより真の人間にてはあるまじと思ひながら、鳥御前はひょうきんな人なれば戯れて遣らんとて腰なる切刃を抜き、打ちかかるようにしたれば、その色赭き男は足を挙げて蹴りたるかと思ひしが、たちまちに前後を知らず。連なる男はこれを探しまわりて谷底に氣絶してあるを見つけ、介抱して家に帰りたれば、鳥御前は今日の一部始終を話し、かかる事は今までに更になきことなり。おのれはこのために死ぬかも知れず、ほかの者には誰にもいうなと語り、三日ほどの間病みて身まかりたり。家の者あまりにその死にようの不思議なればとて、山臥のケンコウ院というに相談せしに、その答えには、山の神たちの遊べる所を邪魔したる故、その祟をうけて死したるなりといえり。この人は伊能先

生なども知合しりあひなりき。今より十余年前の事なり。

九二 九七 昨年こぞのことなり。土淵村の里の子十四五人にて早池峯ふもとに遊び

に行き、はからず夕方たけ近くなりたれば、急ぎて山を下り麓ふもと近くなるこ

ろ、丈たけの高き男の下より急ぎ足に昇りくるに逢あえり。色は黒く眼まなこはき

らきらとして、肩には麻かと思おもわるる古ふるき浅葱色あさぎいろの風呂敷ふろしきにて小さき

包を負おいたり。恐おそろしかりしかども子供の中の一人、どこへ行くかと

此方より声を掛けたるに、小国おくにさ行くと答こたう。この路は小国へ越ゆべ

き方角にはあらざれば、立ちとまり不審するほどに、行き過すぐると思

うまもなく、はや見えずなりたり。山男よと口々に言いいてみなみな遁

げ帰かえりたりといえり。

九三 九八 これは和野の人菊池菊蔵という者、妻は笛吹峠のあなたなる

橋野より来たる者なり。この妻親里へ行きたる間に、糸蔵という五六

歳の男の児病こ気になりたれば、昼過ひるすぎより笛吹峠を越えて妻を連れに

親里へ行きたり。名に負う六角牛の峯たかね続つきなれば山路は樹深く、こと

に遠野分より栗橋分へ下らんとするあたりは、路はウドになりて両方

は岨そはなり。日影はこの岨に隠れてあたりやや薄暗くなりたるころ、後の方より菊蔵と呼ぶ者あるに振り返りて見れば、崖がけの上より下を覗のぞくものあり。顔は赭く眼の光りかがやけること前の話のごとし。お前の子はもう死んで居るぞという。この言葉を聞きて恐ろしさよりも先にはつと思いたりしが、はやその姿は見えず。急ぎ夜の中に妻を伴ともないて帰りたれば、果して子は死してありき。四五年前のことなり。

○ウドとは両側高く切込みたる路のことなり。東海道の諸国にてウタウ坂・謡坂などいうはすべてかくのごとき小さき切通しのことならん。

九九

九四 この菊蔵、柏崎なる姉の家に用ありて行き、振舞ふるまわれたる残

りの餅もちを懐ふところに入れて、

愛宕山の麓ふもとの林を過ぎしに、象坪ぞうつぼの藤七とい

う大酒吞おおざけのみにて彼と仲善なかよしの友に行き逢えり。そこは林の中なれど少しく
芝原しばはらあるところなり。藤七はにこにことしてその芝原を指ゆびさし、ここで
相撲すもうを取らぬかという。菊蔵これを諾し、二人草原にてしばらく遊び

しが、この藤七いかにも弱く軽く自由に抱かかえては投げらるる故ゆえ、面白

きままに三番まで取りたり。藤七が曰く、今日はとてもかなわず、さあ行くべしとて別れたり。四五間けんも行ききのち心づきたるにかの餅見えず。相撲場に戻りて探したれどなし。始めて狐ならんかと思いたれど、外聞を恥じて人にもいわざりしが、四五日ののち酒屋にて藤七に逢いその話をせしに、おれは相撲など取るものか、その日は浜へ行きでありしものと言ひて、いよいよ狐と相撲を取りしこと露頭したり。されど菊蔵はなお他の人々には包み隠してありしが、昨年しんねんの正月の休みに人々酒を飲み狐の話をせしとき、おれもじつはとこの話を白状し、大いに笑われたり。

○象坪は地名にしてかつ藤七の名字なり。象坪という地名のこと『いしがみんどう石神問答』の中にてこれを研究したり。

一〇〇

九五 松崎の菊池某という今年四十三四の男、庭作りの上手じょうずにて、

山に入り草花を掘りてはわが庭に移し植え、形の面白き岩などは重きを厭いとわず家に担にない帰るを常とせり。或る日少し気分重ければ家を出でて山に遊びしに、今までついに見たることなき美しき大岩を見つけた

り。平生へいせいの道楽なればこれを持ち帰らんと思ひ、持ち上げんとせしが非常に重し。あたかも人の立ちたる形して丈たけもやがて人ほどあり。されどほしさのあまりこれを負ひ、我慢して十間ばかり歩みしが、氣の遠くなるくらい重ければ怪しみをなし、路みちの旁かたわらにこれを立て少しくもたれかかるようにしたるに、そのまま石とともにすつと空中に昇り行く心地こころしたり。雲より上になりたるように思ひしがじつに明るく清きところにて、あたりにいろいろの花咲き、しかも何処いずこともなく大勢の人声聞えたり。されど石はなおますます昇り行き、ついには昇り切りたるか、何事も覚えぬようになりたり。その後時過ぎて心づきたる時は、やはり以前のごとく不思議の石にもたれたるままにてありき。この石を家の内へ持ち込みてはいかなることあらんも測りはかがたしと、恐ろしくなりて遁げ帰りぬ。この石は今も同じところにある。おりおりはこれを見て再びほしくなることありといえり。

一〇一

九六 遠野の町に芳公馬鹿よしこうばかとて三十五六なる男、白痴にて一昨年来で生きてありき。この男の癖は路上にて木の切れ塵ちりなどを拾ひ、これ

を捻りてつくづくと見つめまたはこれを嗅ぐことなり。人の家に行きては柱などをこすりてその手を嗅ぎ、何ものにも眼の先きまで取り上げ、にこにことしておりおりこれを嗅ぐなり。この男往来をあるきながら急に立ち留り、石などを拾い上げてこれをあたりの人家に打ちつけ、けたたましく火事だ火事だと叫ぶことあり。かくすればその晩か次の日か物を投げつけられたる家火を発せざることなし。同じこと幾度となくあれば、のちにはその家々も注意して予防をなすといえども、ついに火事を免れたる家は一軒もなしといえり。

一〇二

飯豊の菊池松之丞という人

傷寒を病み、たびたび息を引きつ

めし時、自分は田圃に出でて菩提寺なるキセイ院へ急ぎ行かんとす。足に少し力を入れたるに、図らず空中に飛び上り、およそ人の頭ほどのところを次第に前下りに行き、また少し力を入れるれば昇ること始めのごとし。何とも言われず快し。寺の門に近づくに人群集せり。何故ならんと訝りつつ門を入れれば、紅の芥子の花咲き満ち、見渡すかぎりも知らず。いよいよ心持よし。この花の間に亡くなりし父立てり。お

前もきたのかという。これに何か返事をしながらなお行くに、以前失いたる男の子おりて、トツチャお前もきたかという。お前はここにいたのかと言いつつ近よらんとすれば、今きてはいけないという。この時門の辺にて騒しくわが名を喚ぶ者ありて、うるさきこと限りなければ、よんどころなければ心も重くいやいやながら引き返したりと思えば正氣づきたり。親族の者寄り集い水など打ちそそぎて喚び生かしたるなり。

九八 一〇三 路の傍に山の神、田の神、塞の神の名を彫りたる石を立つる

は常のことなり。また早池峯山・六角牛山の名を刻したる石は、遠野郷にもあれど、それよりも浜にことに多し。

九九 一〇四 土淵村の助役北川清という人の家は字火石ひいしにあり。代々の

山臥やまふしにて祖父は正福院といい、学者にて著作多く、村のために尽した

る人なり。清の弟に福二という人は海岸の田の浜へ婿むこに行きたるが、

先年の大海嘯おおつなみに遭いて妻と子とを失い、生き残りたる二人の子とも

に元の屋敷もとの地に小屋を掛けて一年ばかりありき。夏の初めの月夜に

便所に起き出でしが、遠く離れたところにおいて行く道も浪の打つ渚なぎさなり。霧の布しきたる夜なりしが、その霧の中より男女二人の者の近よるを見れば、女は正ましく亡くなりしわが妻なり。思わずその跡をつけて、遙々はるばると船越村ふなこしの方へ行く崎の洞ほしつあるところまで追いき、名を呼びたるに、振り返りてにこと笑いたり。男はとみればこれも同じ里の者にて海嘯の難に死せし者なり。自分が婿に入りし以前に互いに深く心を通わせたりと聞きし男なり。今はこの人と夫婦になりてありというに、子供は可愛かわいくはないのかといえ、女は少しく顔の色を変えて泣きたり。死したる人と物いうとは思われずして、悲しく情なくなりたれば足元あしもとを見てありし間に、男女は再び足早にそこを立ち退のきて、小浦おうちへ行く道の山陰やまかげを廻り見えたり。追いかけて見たりしがふと死したる者なりしと心づき、夜明けまで道中みちなかに立ちて考え、朝になりて帰ったり。その後久しく煩わづらいたりといえり。

一〇五

一〇〇 船越の漁夫何某。ある日仲間の者とともに吉利吉里きりきりより帰るとて、夜深く四十八坂のあたりを通りしに、小川のあるところに

て一人の女に逢う。見ればわが妻なり。されどもかかる夜中にひとりこの辺くに來べき道理なければ、必定ひつじょう化物ばくものならんと思ひ定め、やにわに魚切庖丁うおきりぼうちようを持ちて後の方より差し通したれば、悲しき声を立てて死したり。しばらくの間は正体を現わさざれば流石さすがに心に懸り、後の事あとを連つれの者に頼み、おのれは馳せて家に帰りしに、妻は事もなく家に待ちてあり。今恐ろしき夢を見たり。あまり帰りの遅ければ夢に途中まで見に出でたるに、山路にて何とも知れぬ者に脅おびやかされて、命を取らるると思ひて目覚めたりという。さてはと合点がてんして再び以前の場所へ引き返してみれば、山にて殺したりし女は連の者が見ておる中なかにについて一匹きつねの狐となりたりといえり。夢の野山を行くやくにこの獸の身を備やとうことありと見ゆ。

一〇六

旅人とよまね豊間根村を過ぎ、夜更ふけ疲れたれば、知音ちいんの者の家

に灯火さといわいの見ゆるを幸さいわいに、入りて休息きあわせんとせしに、よき時に來合きあわせたり、今夕死人あり、留守るすの者なくていかにせんかと思ひしところなり、しばらくの間頼むといいて主人は人を喚よびに行きたり。迷惑めいわく千万せんばんなる

話なれど是非もなく、囲炉裡いろりの側にて煙草タバコを吸いてありしに、死人は老女にて奥の方に寝させたるが、ふと見れば床の上にむくむくと起き直る。胆潰きもつぶれたれど心を鎮め静かにあたりを見廻みまわすに、流し元の水口の穴より狐のごとき物あり、面をさし入れて頻しきりに死人の方を見つめていたり。さてこそと身を潜め窃ひそかに家の外に出で、背戸せとの方に廻りて見れば、正しく狐にて首を流し元の穴に入れ後足を爪立つまたてていたり。ありあ有合あわせたる棒をもてこれを打ち殺したり。

○下閉伊郡豊間根村大字豊間根。

一〇七

一〇二 正月十五日の晩を小正月こしょうがつという。宵よいのほどは子供ら福の神と称して四五人群を作り、袋を持ちて人の家に行き、明あけの方から福の神が舞い込んだと唱となえて餅を貰もらう習慣あり。宵を過ぐればこの晩に限り人々決して戸の外に出づることなし。小正月の夜半過ぎは山の神出でて遊ぶと言いい伝えてあればなり。山口の字丸古立まるこだちにおまさという今三十五六の女、まだ十二三の年のことなり。いかなるわけにてか唯一人にて福の神に出で、ところどころをあるきて遅くなり、淋さびしき路を

帰りしに、向うの方より丈の高き男来てすれちがいたり。顔はすてきに赤く眼はかがやけり。袋を捨てて遁げ帰り大いに煩いたりといえり。

一〇三 一〇八 小正月の夜、または小正月ならずとも冬の満月の夜は、雪

女が出でて遊ぶともいう。童子をあまた引き連れてくるといえり。里の子ども冬は近辺の丘に行き、櫛遊びそりつこあそをして面白さのあまり夜になることあり。十五日の夜に限り、雪女が出るから早く帰れと戒めらるるは常のことなり。されど雪女を見たりという者は少なし。

一〇四 一〇九 小正月の晩には行事甚だ多し。月見つきみというは六つの胡桃くるみの

実みを十二に割り一時いつときに炉ろの火にくべて一時にこれを引き上げ、一列にして右より正月二月と数うるに、満月の夜晴なるべき月にはいつまでも赤く、曇るべき月には直すぐに黒くなり、風ある月にはフーフーと音をたてて火が振ふるうなり。何遍繰り返しても同じことなり。村中いずれの家にてても同じ結果を得るは妙なり。翌日はこの事を語り合ひ、例えば八月の十五夜風とあらば、その歳としの稲こめの蒔入かりいれを急ぐなり。

○五穀の占、月の占多少のヴァリエテをもって諸国に行なわる。

おんようどう
陰陽道に出でしものならん。

一〇五 二一〇 また世中見よなかみというは、同じく小正月の晩に、いろいろの米

にて餅をこしらえて鏡となし、同種の米を膳ぜんの上に平たいらに敷き、鏡餅かがみもち

をその上に伏せ、鍋なべを被せ置かぶきて翌朝これを見るなり。餅につきたる

米粒こめつぶの多きものその年は豊作なりとして、早中晩の種類を扱あび定むる

なり。

一〇六 二一一 海岸の山田にては蜃気楼年々見ゆ。常に外国の景色なりと

いう。見馴みなれぬ都のさまにして、路上の車馬しげく人の往来眼まなこざまし

きばかりなり。年ごとに家の形などいささかも違ちがうことなしといえり。

一〇七 二一二 上郷村に河ぶちのうちという家あり。早瀬川の岸にあり。

この家の若き娘、ある日河原に出でて石を拾ひろいてありしに、見馴みなれぬ

男来たり、木の葉とか何とかを娘にくれたり。丈たけ高く面朱しゆのようなる

人なり。娘はこの日より占うらないの術を得たり。異人は山の神にて、山の神

の子になりたるなりといえり。

一〇八 二一三 山の神の乗り移りたりとて占をなす人は所々にあり。附馬牛つくもうし

村にもあり。本業は木挽こびきなり。柏崎の孫太郎もこれなり。以前は発狂して喪心したりしに、ある日山に入りて山の神よりその術を得たりしのは、不思議に人の心中を読むこと驚くばかりなり。その占いの法は世間の者とは全く異なり。何の書物をも見ず、頼みにきたる人と世間話をなし、その中にふと立ちて常居じょういの中なかをあちこちとあるき出すと思ふほどに、その人の顔は少しも見ずして心に浮びたることをいうなり。当らずということなし。例えばお前のウチの板敷いたじきを取り離し、土を掘りて見よ。古き鏡または刀の折れあるべし。それを取り出さねば近き中に死人ありとか家が焼くるとかいうなり。帰りて掘りて見るに必ずあり。かかる例は指を屈するに勝たえず。

一〇九 二一四

盆わらのころには雨風祭とて藁わらにて人よりも大なる人形にんぎょうを作り、道の岐ちまたに送り行きて立つ。紙にて顔を描えがき瓜うりにて陰陽の形を作り添そえなどす。虫祭の藁人形にはかかることはなくその形も小さし。雨風祭の折は一部落ふえたいこの中なかにて頭屋とうやを拵えらび定め、里人集まりて酒を飲みてのち、一同笛太鼓ふえたいこにてこれを道の辻まで送り行くなり。笛の中なかには桐きり

の木にて作りたるホラなどあり。これを高く吹く。さてその折の歌は「二百十日の雨風まつるよ、どちの方さ祭る、北の方さ祭る」という。○『東国輿地勝覽』によれば韓国にても厲壇を必ず城の北方に作ること見ゆ。ともに玄武神の信仰より来たれるなるべし。

二二五

一一〇　ゴンゲサマというは、神楽舞の組ごとに一つずつ備われる木彫きぼりの像にして、獅子頭ししがしらとよく似て少しく異なれり。甚だ御利生のあるものなり。新張にいばりの八幡社の神楽組のゴンゲサマと、土淵村字五日市の神楽組のゴンゲサマと、かつて途中にて争いをなせしことあり。新張のゴンゲサマ負けて片耳かたみみを失いたりとて今もなし。毎年村々を舞いてあるく故、これを見知らぬ者なし。ゴンゲサマの靈験れいげんはことに火伏ひふせにあり。右の八幡の神楽組かつて附馬牛村に行きて日暮ひぐれ宿を取り兼ねしに、ある貧しき者の家にて快くこれを泊めて、五升榊ますを伏せてその上にゴンゲサマを座すえ置き、人々は臥ふしたりしに、夜中にかがつと物を囁かむ音のするに驚きて起きてみれば、軒端のきばたに火の燃えつきてありしを、榊の上なるゴンゲサマ飛び上り飛び上りして火を喰くい消して

ありしなりと。子どもの頭を病む者など、よくゴンゲサマを頼み、その病を嘔みてもらうことあり。

二二六

一一一 山口、飯豊、附馬牛の字荒川東禅寺および火渡、青笹の字

中沢ならびに土淵村の字土淵に、ともにダンノハナという地名あり。その近傍にこれと相對して必ず蓮台野れんたいのという地あり。昔は六十を超えたる老人はすべてこの蓮台野へ追い遣るの習ならいありき。老人はいたずらに死んで了うこともならぬ故に、日中は里へ下り農作して口を糊ぬらしたり。そのためにも山口土淵辺にては朝あしたに野らに出づるをハカダチといい、夕方野らより帰ることをハカアガリというといえり。

○ダンノハナは壇の塙なるべし。すなわち丘の上にて塚を築きたる場所ならん。境の神を祭るための塚なりと信ず。蓮台野もこの類なるべきこと『石神問答』中にいえり。

二二七

一一二 ダンノハナは昔館たてのありし時代に囚人を斬きりし場所なるべしという。地形は山口のも土淵飯豊のもほぼ同様にて、村境の岡の上なり。仙台にもこの地名あり。山口のダンノハナは大洞おおほらへ越ゆる丘の

上にて館址たてあとよりの続きなり。蓮台野はこれと山口の民居を隔てて相対す。蓮台野の四方はすべて沢なり。東はすなわちダンノハナとの間の低地、南の方を星谷という。此所には蝦夷屋敷えぞやしきという四角に凹へこみたるところ多くあり。その跡あときわめて明白なり。あまた石器を出す。石器土器の出るところ山口に二ヶ所あり。他の一は小字こあざをホウリヨウという。ここの土器と蓮台野の土器とは様式全然殊ことなり。後者のは技巧いささかもなく、ホウリヨウのは模様もようなども巧たくみなり。埴輪はにわもここより出づ。また石斧石刀の類も出づ。蓮台野には蝦夷銭えぞせんとて土にて銭の形をしたる径二寸ほどの物多く出づ。これには単純なる渦紋うずもんなどの模様あり。字ホウリヨウには丸玉・管玉くだたまも出づ。ここの石器は精巧にて石の質も一致したるに、蓮台野のは原料いろいろなり。ホウリヨウの方は何の跡ということもなく、狭き一町歩いっちょうふほどの場所なり。星谷は底かたの方今は田となれり。蝦夷屋敷はこの両側に連なりてありしなりという。このあたりに掘れば崇たたりありという場所二ヶ所ほどあり。

○外ほかの村々にても二所の地形および関係これに似たりという。

○星谷という地名も諸国にあり星を祭りしところなり。

○ホウリヨウ権現は遠野をはじめ奥羽一円に祀らるる神なり。蛇の神なりという。名義を知らず。

一一三 二八 和野にジョウツカ森というところあり。象を埋めし場所なりといえり。此所だけには地震なしとて、近辺にては地震の折はジョウツカ森へ遁げよと昔より言い伝えたり。これは確かに人を埋めたる墓なり。塚のめぐりには堀あり。塚の上には石あり。これを掘れば崇たたりありという。

○ジョウズカは定塚、庄塚または塩塚などとかきて諸国にあまたあり。これも境の神を祀りしところにて地獄のシヨウツカの奪衣婆だつえはの話などと関係あること『石神問答』に詳つまびらかにせり。また象坪などの象頭神とも関係あれば象の伝説は由よしなきにあらず、塚を森といふことも東国の風なり。

一一四 二九 山口のダンノハナは今共同墓地なり。岡の頂上にうつ木を栽うえめぐらしその口は東方に向かいて門口もんぐちめきたるところあり。そ

の中ほどに大なる青石あり。かつて一たびその下を掘りたる者ありしが、何ものをも発見せず。のち再びこれを試みし者は大なる瓶かめあるを見たり。村の老人たち大いに叱しかりければ、またもとのままになし置きたり。館たての主の墓なるべしという。此所に近き館の名はボンシヤサの館という。いくつかの山を掘り割りて水を引き、三重四重に堀を取り廻めぐらせり。寺屋敷・砥石森といしもりなどという地名あり。井の跡とて石垣いしがき残れり。山口孫左衛門の祖先ここに住めりという。『遠野古事記』とおのこじきに詳つまびらかなり。

一一五 一一〇 御伽話おとぎばなしのことを昔々むかしむかしという。ヤマハハの話最も多くあり。

ヤマハハは山姥やまうばのことなるべし。その一つ二つを次に記すべし。

一一六 一一二 昔々あるところにトトとガガとあり。娘を一人持てり。娘を置きて町へ行くとして、誰がきても戸を明けるなど戒しめ、鍵かぎを掛けて出でたり。娘は恐ろしければ一人炉にあたりすくみていたりしに、真昼まひるま間に戸を叩きてここを開けと呼ぶ者あり。開かずば蹴破けやぶるぞと嚇おどす故ゆえに、是非なく戸を明けたれば入りきたるはヤマハハなり。炉の横座よこざに躡ふみはたかりて火にあたり、飯をたきて食わせよという。その言葉

に従い膳を支度してヤマハハに食わせ、その間に家を遁げ出したるに、ヤマハハは飯を食い終りて娘を追い来たり、おいおいにその間近く今にも背に手の触るるばかりになりし時、山の蔭にて柴を苜る翁に逢う。おれはヤマハハにぼっかけられてあるなり、隠してくれよと頼み、苜り置きたる柴の中に隠れたり。ヤマハハ尋ね来たりて、どこに隠れたかと柴の束をのけんとして柴を抱えたるまま山より滑り落ちたり。その隙にここを遁れてまた萱を苜る翁に逢う。おれはヤマハハにぼっかけられてあるなり、隠してくれよと頼み、苜り置きたる萱の中に隠れたり。ヤマハハはまた尋ね来たりて、どこに隠れたかと萱の束をのけんとして、萱を抱えたるまま山より滑り落ちたり。その隙にまたここを遁れ出でて大きな沼の岸に出でたり。これよりは行くべき方もなければ、沼の岸の大木の梢に昇りいたり。ヤマハハはどけえ行つたとて遁がすものかとして、沼の水に娘の影の映れるを見てすぐに沼の中に飛び入りたり。この間に再び此所を走り出で、一つの笹小屋のあるを見つけ、中に入りて見れば若き女いたり。此にも同じことを告げて石の

唐櫃からうどのありし中へ隠してもらいたるところへ、ヤマハハまた飛び来た
り娘のありかを問えども隠して知らずと答えたれば、いんね来ぬはず
はない、人くさい香がするものという。それは今雀すずめを炙あぶつて食った故
なるべしと言え、ヤマハハも納得なっとくしてそんなら少し寝ねん、石のから
うどの中にしようか、木のからうどの中がよいか、石はつめたし木の
からうどの中と言いて、木の唐櫃の中に入りて寝たり。家の女はこ
れに鍵かぎを下おろし、娘を石のからうどより連れ出し、おれもヤマハハに連
れて来られたる者なればともどもにこれを殺して里へ帰らんとて、錐きり
を紅あかく焼きて木の唐櫃の中に差し通したるに、ヤマハハはかくとも知
らず、ただ二十日鼠はつかねずみがきたと言えり。それより湯を煮立にたてて焼錐やききりの穴
より注そそぎ込みて、ついにそのヤマハハを殺し二人ともに親々の家に帰
りたり。昔々の話の終りはいずれもコレデンドハレという語をもつ
て結ぶなり。

一一七 二二三 昔々これもあるところにトトとガガと、娘の嫁に行く支度

を買いに町へ出で行くとて戸を鎖しじし、誰がきても明けるなよ、はアと

答えたれば出でたり。昼のころヤマハハ来たりて娘を取りて食い、娘の皮を被り娘になりておる。夕方二人の親帰りて、おりこひめこ居たかと門の口より呼べば、あ、いたます、早かつたなしと答え、二親は買い来たりしいろいろの支度の物を見せて娘の悦ぶ顔を見たり。次の日夜の明けたる時、家の鶏羽ばたきして、糠屋の隅ツ子見ろじや、けけろと啼く。はて常に変りたる鶏の啼きようかなと二親は思いたり。それより花嫁を送り出すとてヤマハハのおりこひめこを馬に載せ、今や引き出さんとするときまた鶏啼く。その声は、おりこひめこを載せなえでヤマハハのせた、けけろと聞ゆ。これを繰り返して歌いしかば、二親も始めて心づき、ヤマハハを馬より引き下して殺したり。それより糠屋の隅を見に行きしに娘の骨あまた有りたり。

○糠屋は物おきなり。

一一八 二三 紅皿欠皿の話も遠野郷に行なわる。ただ欠皿の方はその名

をヌカボという。ヌカボは空穂のことなり。継母に悪まれたれど神の恵ありて、ついに長者の妻となるという話なり。エピソードにはいろ

いろの美しき絵えよう様あり。折おりあらば詳しく書き記すべし。

一一九 一二四 遠野郷の獅子踊ししおどりに古くより用いたる歌の曲あり。村により

人によりて少しずつの相異あれど、自分の聞きたるは次のごとし。百年あまり以前の筆写なり。

○獅子踊はさまでこの地方に古きものにあらず。中代これを輸入せしものなることを人よく知れり。

一 まりり来て此橋このを見申みもうせや、いかなもをさは踏ふみそめたやら、

わだるがくかいざるもの

一 此御馬場このおんばばを見申みもうせや、杉原七里大門すぎはらななりおおもんまで

一 まりり来て此このもんを見申みもうせや、ひの木さわらで門立かどたて、是これぞ

目出めでたい白かねの門

一 門もんの戸かどびらおすひらき見申みもうせや、あらの御せだい

○

一 まりり来てこの御本堂を見申みもうせや、いかな大工だいくは建てたやら

- 一 建てた御人おひとは御手とから、むかしひたのたくみの立てた寺也なり
- 一 小島ではひの木さわらで門立かどたて、是ぞ目出たい白金しろかねの門
- 一 白金の門戸かどびらおすひらき見申せや、あらの御せだい
- 一 八むねつ棟ぢくりむねにひわだぶきの、上かみにおひたるから松
- 一 から松のみぎり左ひだりに涌わくいぢみ、汲めども吞のめどもつきひざる
- もの
- 一 あさ日さすよう日かゞやく大寺也おおてら、さくら色のちごは百人
- 一 天からおづるちよ硯水すずりみず、まつて立たれる
- 一 まるり来てこの御台所見申せや、め釜がまを釜かまに釜は十六
- 一 十六の釜で御代ごよたく時は、四十八の馬で朝草あさくさ苳かる
- 一 其馬そので朝草あさくさにききやう小萱こがやを苳かりまぜて、花でかゞやく馬屋うまやなり
- り
- 一 かゞやく中のかげ駒こまは、せたいあがれを足あがきする
-
- 一 此庭に歌のぞうじはありと聞く、あしびながらも心はづかし

- 一 われくはきによならひしけふあすぶ、そつ事ごめんなり
- 一 しやうち申せや限なし、一礼申して立てや友だつ
- 一 まるり来てこの榭を見申せや、四方四角榭形の庭也
- 一 まるり来て此宿を見申せや、人のなさげの宿と申
- 一 参り来て此お町を見申せや、豎町十五里横七里、△△出羽にま
よおな友たつ
- 出羽の字もじつは不明なり。
- 一 まるり来てこのけんだん様を見申せや、御町間中にはたを立前
- 一 まいは立町油町
- 一 けんだん殿は二かい座敷に昼寝すて、銭を枕に金の手遊
- 一 参り来てこの御札見申せば、おすがいろぢきあるまじき札
- 一 高き処は城と申し、ひくき処は城下と申す也
- 一 まるり来てこの橋を見申せば、こ金の辻に白金のはし
- 一 まるり来てこの御堂見申せや、四方四面くさび一本
- 一 扇とりすゞ取り、上さ参らばりそうある物

○すゞは数珠じゆず、りそうは利生か。

一 ころばすらに小金こがねのたる木に、水のせ懸がくるぐしになみたち

○ころばすら文字不分明。

一 此庭に歌の上うたじずはありと聞く、歌へながらも心はづかし

一 おんげんべりこおらいべり、山と花ごぎ是この御庭へさらゝすか

れ

○雲縹縁、高麗縁なり。

一 まぎゑの台に玉のさかすきよりすゑて、是の御庭へ直し置く

一 十七はちやうすひやけ御手おてにもちをすやく廻まわし御庭かゝやく

一 この御酒ごしゆ一つ引受ひきうけたもるなら、命長くじめうさかよる

一 さかなには鯛たいもすゞきもござれ共ども、おどにきこいしからのかる

うめ

一 正しやうち申まうや限なし、一礼申て立や友たつ、京みやこ

一 仲だち入れよや仲入れろ、仲たづなけれや庭はすんげない

一 すかの子は生れておりれや山めぐる、我等も廻まわる庭めぐる

- すかの子は鹿の子なり。遠野の獅子踊の面は鹿のようなり。
- 一 これの御庭におい柱の立つときは、ちのみがき若くなるもの
- ちのみがきは鹿の角磨つのみがきなるべし。
- 一 松島の松をそだてゝ見どすれば、松にからするちたのえせもの
- ちたは蔦つた。
- 一 松島の松にからまるちたの葉も、えんが無なれやぶろりふぐれる
- 一 京で九貫のから絵のびよぼ、三よへにさらりたてまはす
- びよぼは屏風びょうぶなり。三よへは三四重か、この歌最もおもしろし。
- 一 仲たち入れろや仲入れろ、仲立なければや庭すんげなえ
- めず ぐりは鹿の妻つまえら扱あびなるべし。
- 一 鹿の子は生れおりれや山廻る、我らもめぐる庭を廻るな
- 一 女鹿めしかたづねていかんとして白山はくさんの御山かすみかゝる

○して、字は^{しめ}めてとあり。不明

うるすやな風はかすみを吹き払て、今こそ女鹿あけてたちねる

○うるすやなは^{うれ}嬉しやななり。

何と女鹿はかくれてもひと村すゝきあけてたつねる

笹^{ささ}のこのはの女鹿^{めじし}子は、何とかくてもおひき出さる

女鹿大鹿ふりを見ろ、鹿の心みやこなるもの

奥のみ山の^{そろ}大鹿はことすはじめておどりでき候

女鹿とらてあうがれて心ぢくすくをろ鹿かな

松島の松をそだてゝ見とすれば松にからまるちたのえせもの

松島の松にからまるちたの葉も、えんがなけれやぞろりふぐれ

る

沖のと中の^{ちゆう}浜す鳥、ゆらりこがれるそろりたつ物

なげくさを如何^{いかな}御人^{おひと}は御出^{おいで}あつた、出た御人は心ありがたい

この代^よを如何^{いかに}大工は御指^さしあた、四つ角^{かど}て宝遊ばし

一 この御酒を如何な御酒だと思し召す、おどに聞いしが 菊の酒

一 此錢を如何な錢たと思し召す、伊勢お八まち錢熊野参の遣ひあまりか

一 此紙を如何な紙と思し召す、はりまだんぜかかしま紙か、おりにそたひ遊はし

○播磨檀紙にや。

一 あふぎのお所いぢくなり、あふぎの御所三内の宮、内てすめるはかなめなり、おりめにそたかさなる

○いぢくなりはいずこなるなり。三内の字不明。仮にかくよめり。

後註

- 一 ページの左右中央
- 二 ここから33字詰め
- 三 同行大見出し
- 四 同行大見出し終わり
- 五 ここで字詰め終わり
- 六 「一」は同行大見出し
- 七 「二」は同行大見出し
- 八 「三」は同行大見出し
- 九 「四」は同行大見出し
- 一〇 「五」は同行大見出し
- 一一 「六」は同行大見出し
- 一二 「七」は同行大見出し

- 一三 「八」は同行大見出し
- 一四 「九」は同行大見出し
- 一五 「二〇」は同行大見出し
- 一六 「二一」は同行大見出し
- 一七 「二二」は同行大見出し
- 一八 「二三」は同行大見出し
- 一九 「二四」は同行大見出し
- 二〇 「二五」は同行大見出し
- 二一 「二六」は同行大見出し
- 二二 「二七」は同行大見出し
- 二三 「二八」は同行大見出し
- 二四 「二九」は同行大見出し
- 二五 「三〇」は同行大見出し
- 二六 「三一」は同行大見出し
- 二七 「三二」は同行大見出し
- 二八 「三三」は同行大見出し

遠野物語

- 二九 「二四」は同行大見出し
三〇 「二五」は同行大見出し
三一 「二六」は同行大見出し
三二 「二七」は同行大見出し
三三 「二八」は同行大見出し
三四 「二九」は同行大見出し
三五 「三〇」は同行大見出し
三六 「三一」は同行大見出し
三七 「三二」は同行大見出し
三八 「三三」は同行大見出し
三九 「三四」は同行大見出し
四〇 「三五」は同行大見出し
四一 「三六」は同行大見出し
四二 「三七」は同行大見出し
四三 「三八」は同行大見出し
四四 「三九」は同行大見出し

遠野物語

- 四五 「四〇」は同行大見出し
四六 「四一」は同行大見出し
四七 「四二」は同行大見出し
四八 「四三」は同行大見出し
四九 「四四」は同行大見出し
五〇 「四五」は同行大見出し
五一 「四六」は同行大見出し
五二 「四七」は同行大見出し
五三 「四八」は同行大見出し
五四 「四九」は同行大見出し
五五 「五〇」は同行大見出し
五六 「五一」は同行大見出し
五七 「五二」は同行大見出し
五八 「五三」は同行大見出し
五九 「五四」は同行大見出し
六〇 「五五」は同行大見出し

遠野物語

- 六一 「五六」は同行大見出し
六二 「五七」は同行大見出し
六三 「五八」は同行大見出し
六四 「五九」は同行大見出し
六五 「六〇」は同行大見出し
六六 「六一」は同行大見出し
六七 「六二」は同行大見出し
六八 「六三」は同行大見出し
六九 「六四」は同行大見出し
七〇 「六五」は同行大見出し
七一 「六六」は同行大見出し
七二 「六七」は同行大見出し
七三 「六八」は同行大見出し
七四 「六九」は同行大見出し
七五 「七〇」は同行大見出し
七六 「七一」は同行大見出し

遠野物語

- 七七 「七二」は同行大見出し
七八 「七三」は同行大見出し
七九 「七四」は同行大見出し
八〇 「七五」は同行大見出し
八一 「七六」は同行大見出し
八二 「七七」は同行大見出し
八三 「七八」は同行大見出し
八四 「七九」は同行大見出し
八五 「八〇」は同行大見出し
八六 「八一」は同行大見出し
八七 「八二」は同行大見出し
八八 「八三」は同行大見出し
八九 「八四」は同行大見出し
九〇 「八五」は同行大見出し
九一 「八六」は同行大見出し
九二 「八七」は同行大見出し

- 九三 「八八」は同行大見出し
九四 「八九」は同行大見出し
九五 「九十」は同行大見出し
九六 「九一」は同行大見出し
九七 「九二」は同行大見出し
九八 「九三」は同行大見出し
九九 「九四」は同行大見出し
一〇〇 「九五」は同行大見出し
一〇一 「九六」は同行大見出し
一〇二 「九七」は同行大見出し
一〇三 「九八」は同行大見出し
一〇四 「九九」は同行大見出し
一〇五 「一〇〇」は同行大見出し
一〇六 「一〇一」は同行大見出し
一〇七 「一〇二」は同行大見出し
一〇八 「一〇三」は同行大見出し

遠野物語

- 一〇九 「二〇四」は同行大見出し
- 一一〇 「二〇五」は同行大見出し
- 一一一 「二〇六」は同行大見出し
- 一一二 「二〇七」は同行大見出し
- 一一三 「二〇八」は同行大見出し
- 一一四 「二〇九」は同行大見出し
- 一一五 「二一〇」は同行大見出し
- 一一六 「二一一」は同行大見出し
- 一一七 「二一二」は同行大見出し
- 一一八 「二一三」は同行大見出し
- 一一九 「二一四」は同行大見出し
- 一二〇 「二一五」は同行大見出し
- 一二一 「二一六」は同行大見出し
- 一二二 「二一七」は同行大見出し
- 一二三 「二一八」は同行大見出し
- 一二四 「二一九」は同行大見出し

底本：「遠野物語・山の人生」岩波文庫 岩波書店

1976（昭和 51）年 4 月 16 日第 1 刷発行

2007（平成 19）年 10 月 4 日第 47 刷改版発行

2010（平成 22）年 3 月 5 日第 50 刷発行

※図版は、「遠野物語増補版」郷土研究社、1935（昭和 10）年 7 月 31 日発行からとりました。

入力：Nana ohbe

校正：阿部哲也

2012 年 12 月 16 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。